

第1章

中学生の 学習に関する意識・実態

- 「学習に関する意識・実態調査」の分析より -



第1節 中学生の学習行動

1. 学校での学習の様子

①好きな教科・嫌いな教科

中学生の一番好きな教科は「体育」、次いで「美術」に人気が集まる。こうした好き嫌いは、男女で大きな違いがある。第2回調査で人気を回復した「理科」「数学」は、ふたたび「好き」と回答する割合が低下している。



あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか。

中学生は、学校での勉強をどのようにとらえているのだろうか。それぞれの教科等を「どのくらい好きか」「どのくらい理解しているか」「特にがんばって勉強したいものはどれか」の3点について尋ねてみた。なお、今回は、すでに移行措置によって先行実施されている「総合的な学習の時間」も選択肢に加えられている。

まず、中学生が一番好きな教科は、「体育」で67.0%に及び、他を引き離している（「とても好き」「まあ好き」の合計：表1-1-1）。以下、「美術」（49.3%）が2番目に支持され、「音楽」「理科」「技術・家庭」「国語」「社会」「英語」が僅差の40%台で続いている。極端に嫌われている教科等がない代わりに、圧倒的多数が「好き」という教科等もない。今回新たに導入された「総合的な学習の時間」は38.5%にとどまっており、「履修したことがない」中学生を除いて計算し直しても40%強にすぎない。「好き嫌い」という次元で考える限り、「総合的な学習の時間」

は学校での勉強に大きな変化をもたらしているとは言えない。

性別にみると、教科の好き嫌いには大きな男女差がみられる（同表）。男子が極端に好む教科等は「理科」（男女差＝19.5%）、「数学」（13.4%）、「体育」（11.9%）、「社会」（10.5%）、「技術・家庭」（10.3%）であり、女子は「音楽」（29.3%）、「美術」（14.7%）、「国語」（13.8%）を好む傾向がある。この教科の選好は、その後の進路選択パターンに反映されることになる。

第1回・第2回調査と比べて、いくつかが目立った変化がみられた（図1-1-1）。特に、第2回調査で10ポイント前後も率を伸ばした「理科」「数学」であるが、第3回調査では、いずれも6ポイントの減少となっている。また、「とても嫌い」「まあ嫌い」という中学生の割合は、各教科ともほとんど変化を示さなかったが、唯一「社会」はこの10余年で8ポイント以上増加し、「嫌い」と回答する生徒が増えている（基礎集計表参照）。

表1 - 1 - 1 好きな教科(性別)

(%)

	全体(2503)	男子(1307)		女子(1184)
国語	43.2	36.7	≪	50.5
社会	42.8	47.7	≫	37.2
数学	39.4	45.8	≫	32.4
理科	46.8	56.1	≫	36.6
英語	42.8	40.5		45.2
音楽	46.9	32.9	≪	62.2
美術	49.3	42.3	≪	57.0
体育	67.0	72.7	≫	60.8
技術・家庭	45.0	50.0	≫	39.7
総合的な学習の時間	38.5	39.2		37.6

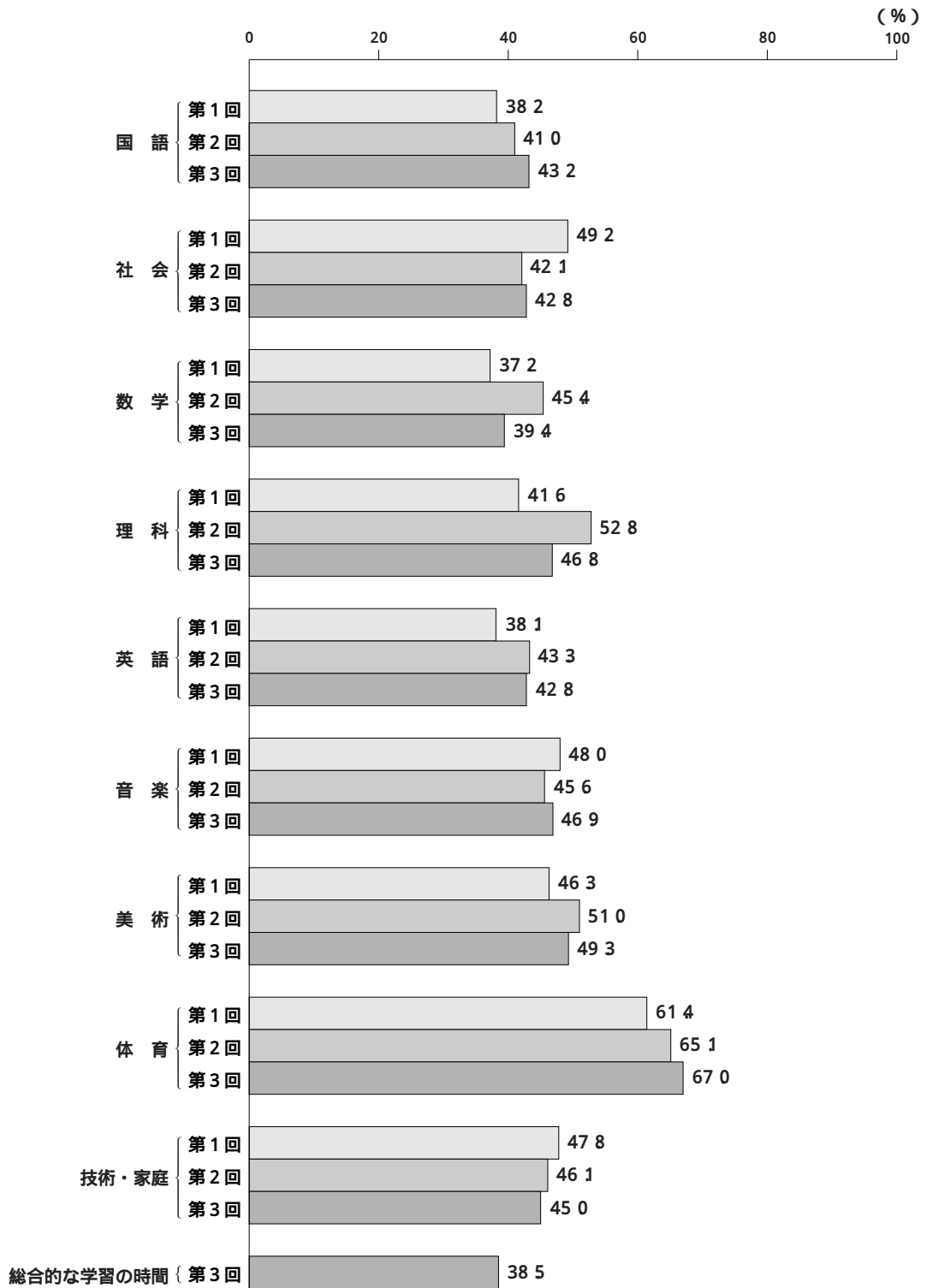
注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。

注2) 「総合的な学習の時間」にだけ、選択項目の中に「履修したことがない(5.4%)が含まれる。

注3) ≪ ≫は男女で10%以上差があるもの。

注4) ()内はサンプル数。

図1-1-1 好きな教科(時系列)



注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。

注2) サンプル数は第1回2544人、第2回2755人、第3回2503人。

②授業の理解度

5教科の授業の理解度では、「数学」と「国語」を比較的高く自己評価している。「国語」「社会」「数学」は第2回調査よりも上昇し、中学生の意識の中では、理解度は低下していないようだ。



学校の授業をどのくらい理解していますか(わかっていますか)。

中学生は、「5教科」の授業をどの程度理解しているのか。彼らの自己評価をもとに、およその傾向を探ってみた。「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」を加えた割合でみると、「数学」(53.5%)と「国語」(53.4%)が比較的高いが、他の3教科も4割台に達している。性別による違いには、前項の教科等の「好き嫌い」がそのまま投影

された形となっている(表1-1-2)。

時系列でみると、一貫して低下している教科はなく、特に「国語」「社会」「数学」では第2回調査よりもいくらか増えている(同表)。また、「ほとんどわかっていない」層が増加傾向にあるとはいえ(基礎集計表参照)、少なくとも中学生の意識の中では理解度は低下していないといってよい。

表1-1-2 授業の理解度(時系列・性別)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)	第3回	
				男子(1307)	女子(1184)
国語	45.8	47.0	53.4	49.8 <	57.4
社会	43.3	38.5	43.3	49.8 >>	36.0
数学	46.4	52.4	53.5	58.2 >	48.3
理科	41.1	48.9	46.5	54.9 >>	37.1
英語	39.3	46.0	45.7	44.5	47.0

注1) 数値は「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計。

注2) < >>は男女で10%以上、< >は5%以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。

③がんばって勉強したい教科

中学生が一番がんばって勉強したいのは「英語」で、次いで「数学」である。「総合的な学習の時間」は「がんばって勉強する」ものではないという構えがみられる。「体育」をがんばって勉強したいという中学生が大幅に増え、「音楽」「美術」も伸びている。

Q

あなたは、これから学校で、どんな教科や学習の時間をがんばって勉強したいと思いますか。特にがんばりたいと思うものを3つまで選んでください。

中学生は、どんな教科等を「がんばって勉強したい」と考えているのだろうか。「特にがんばりたいと思うもの」を3つあげてもらった。

もっとも多かったのは、「英語」(58.7%)で、これに「数学」(55.1%)が続く。1割ほど差をあけられて「社会」(44.5%)があがっており、3割を超えるのはこの3教科だけだった。以下、「体育」(29.6%)、「理科」(29.0%)、「国語」(27.1%)が比較的多い。これに対して、「技術・家庭」(8.5%)や「総合的な学習の時間」(9.8%)をあげる者はきわめて少ない。これらは、「がんばって勉強する」ような教科・時間としてはとらえられていないのかもしれない(表1-1-3)。

性別で見ると、女子が「音楽」「数学」「英語」、男子が「国語」「理科」「体育」をあげる傾向が強いことがわかる。

時系列変化については、第3回調査では「総合的な学習の時間」が新たに選択肢に加えられたので単純な比較はできない。ただし、第1回調査の結果と比べると、これまで「がんばって勉強したい」と思われていた教科(「英語」「国語」「数学」「理科」)で数値が低下し、逆にそうでなかった教科(「体育」「音楽」「美術」)で伸びが著しいという大まかな傾向はみられる。なかでも、「体育」を「がんばって勉強したい」とする中学生の割合はこの10余年で2倍に達している。

表1-1-3 がんばって勉強したい教科(時系列・性別)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)	第3回	
				男子(1307)	女子(1184)
国語	37.9	35.9	27.1	31.4 >	22.3
社会	44.3	46.5	44.5	43.5	45.8
数学	63.6	61.0	55.1	51.7 <	58.8
理科	33.1	34.7	29.0	31.7 >	26.1
英語	72.0	61.6	58.7	56.7	61.1
音楽	9.6	11.8	14.3	10.8 <	18.1
美術	10.3	13.9	14.1	13.0	15.3
体育	14.5	19.2	29.6	32.1 >	26.8
技術・家庭	7.1	8.4	8.5	9.9	6.9
総合的な学習の時間	—	—	9.8	9.9	9.5

注1) 第1回・第2回調査は9科目中3つまでを選択、第3回調査は10科目中3つまで選択。

注2) —は該当項目なし。

注3) < >は男女で5%以上差があるもの。

注4) ()内はサンプル数。

④授業の受け方

板書をきちんとノートに書きつけることは広く習慣化されている。授業の受け方がより積極的になった第2回調査の特徴を引き継いでいる。ただし、授業の進度や難易度に違和感を覚える女子が依然として多い。



あなたの授業中の様子についてうかがいます。

中学生の授業の受け方やテストに対する構えについて、13項目にわたって尋ねてみた。

「よくある」「時々ある」を合計した割合がもっとも多かったのは、「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」で、ほとんど全員が該当している。「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」ことも過半数の中学生にあてはまり、特に女子にこの傾向が強い(女子64.1%に対して男子44.1% : 表1-1-4)。女子の場合には、ノートをとる習慣が男子よりも身につけているようである。

また、「本当は解ける問題を不注意で間違えるとくやしいと思う」や「テストで間違えるとくやしいと思う」という意識も9割程度の中学生にとってありふれたものとなっている。「正答が誤答か」ということへのこだわり比べて、「テストで間違えた問題をやり直す」という行動は比較的まれであり、57.8%が該当するにすぎない。自らの弱点を克服し、さらに次のステップにつなげていくことはあまり実行されていない。学ぶ内容そのものへのこだわりが比較的薄くなっているようである。

さらに、「授業の内容が難しいと思う」(63.4%)も全体の3分の2近くに達しており、「授業の内容が簡単すぎると思う」(19.7%)の3倍以上となっている。「近くの人とおしゃべりをする」(61.0%)や「ぼーっと他のことを考えている」(61.0%)という回答が多いこともこうした授業の難しさと無関係ではない。「授業中にいぬわりをする」(30.5%)や「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」(28.8%)もおよそ3割が該当する一方で、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」という中学生は28.3%となっている。

第2回調査と比べると大きな変化はみられず、授業の受け方がより積極的になった第2回調査の傾向をそのまま引き継いだ形となっている(図1-1-2)。また、「授業の内容が難しいと思う」に「よくある」と回答した割合が4.6ポイント増加しているが(基礎集計表参照)特に女子の中に授業の進度や難易度に違和感を覚える層が依然として多いことによると考えられる。女子の「理数離れ」が根強いことが背景にあるようである。

表1-1-4 授業の受け方(性別)

(%)

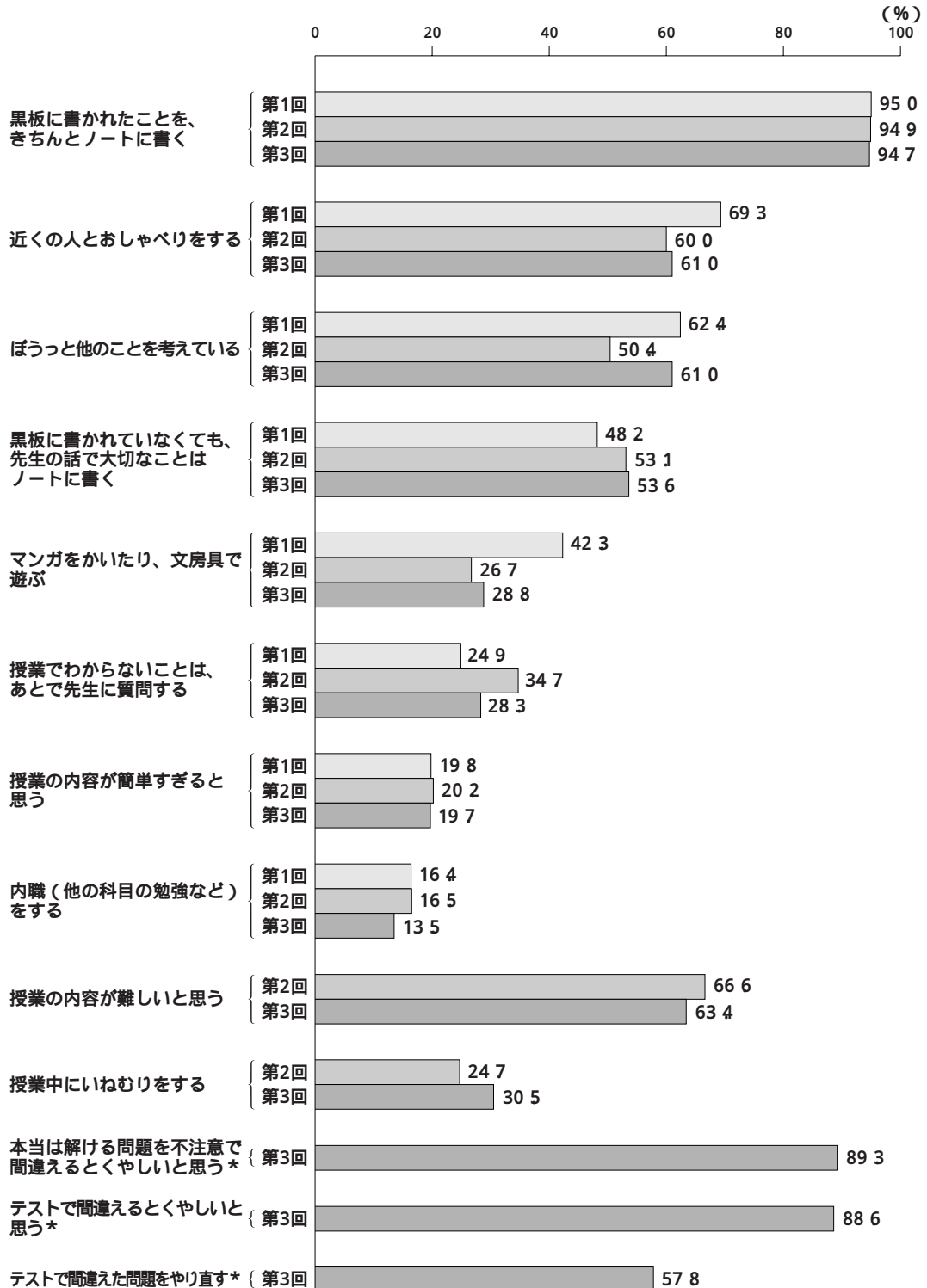
	全体(2503)	男子(1307)	女子(1184)
黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く	94.7	92.6	97.0
近くの人とおしゃべりをする	61.0	62.0	59.9
ぼうっと他のことを考えている	61.0	56.4	< 66.3
黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く	53.6	44.1	≪ 64.1
マンガをかいたり、文房具で遊ぶ	28.8	27.9	29.6
授業でわからないことは、あとで先生に質問する	28.3	28.0	28.4
授業の内容が簡単すぎると思う	19.7	25.3	≫ 13.4
内職(他の科目の勉強など)をする	13.5	14.1	13.0
授業の内容が難しいと思う	63.4	57.4	≪ 70.0
授業中にいねむりをする	30.5	30.6	30.3
本当は解ける問題を不注意で間違えるとくやしいと思う	89.3	87.8	90.8
テストで間違えるとくやしいと思う	88.6	86.8	90.4
テストで間違えた問題をやり直す	57.8	54.3	< 61.7

注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。

注2) ≪ ≫は男女で10%以上、< >は5%以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。

図1-1-2 授業の受け方(時系列)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。

注2) *は第1回に該当項目なし。*は第1回、第2回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2544人、第2回2755人、第3回2503人。

⑤好きな学校の勉強方法

新しい授業スタイルがかなり普及している。しかし、多くの中学生は「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表する」など主体的にじっくりと調べ発信していく勉強方法を好んではない。



あなたは、次にあげる学校の勉強方法は、どのくらい好きですか。

ここでは、学校での勉強方法を10項目設定し、それぞれについて「とても好き」「好き」「好きでない」「ぜんぜん好きでない」「やっていない」のいずれかを選択してもらった。

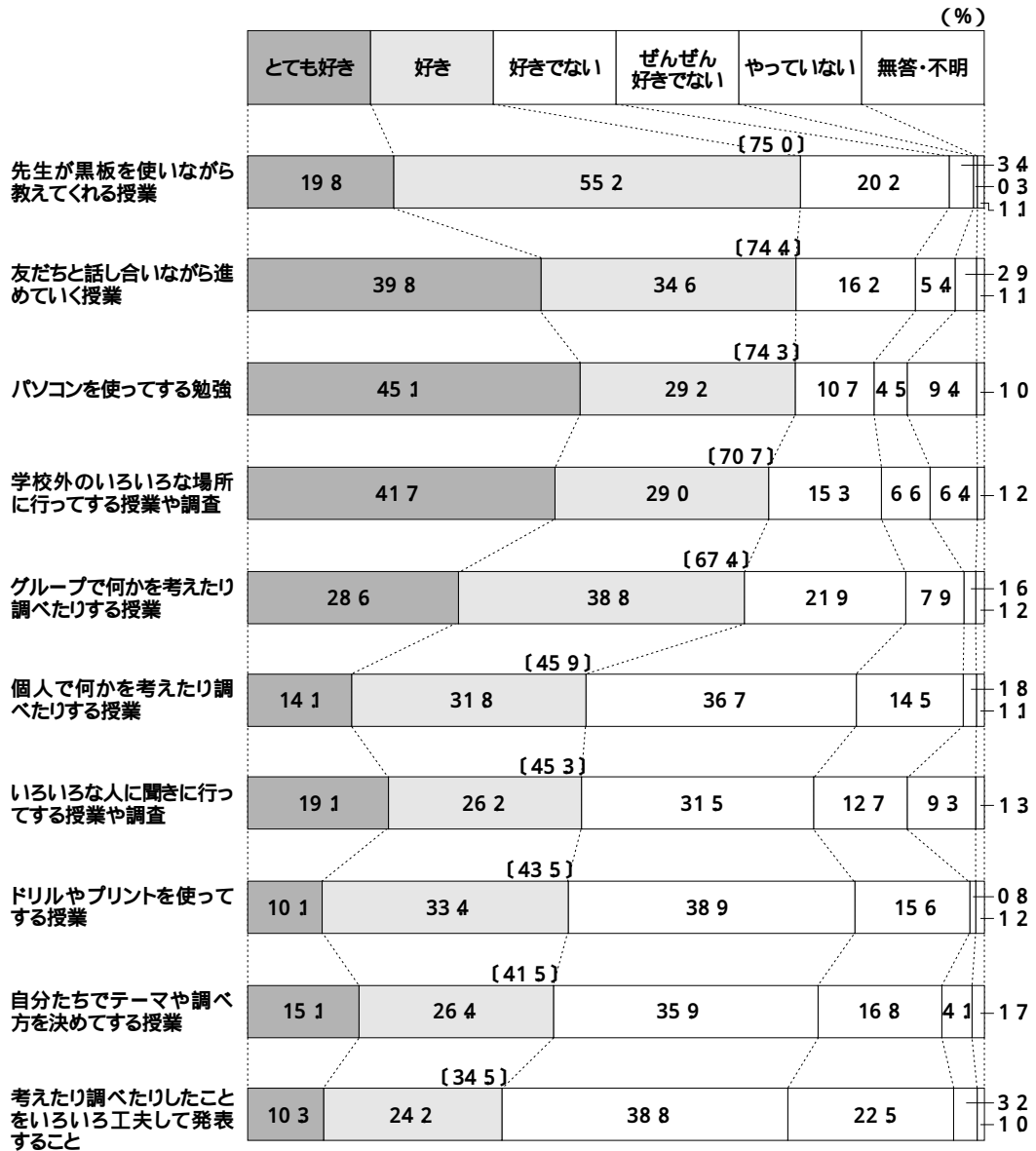
まず、「やっていない」という回答が多かったものから順にあげると「パソコンを使ってする勉強」(9.4%)、「いろいろな人に聞きに行っている授業や調査」(9.3%)、「学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査」(6.4%)、「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」(4.1%)となる(図1-1-3)。これらは比較的新しいスタイルの勉強方法であるが、「やっていない」は、いずれも全体の1割未満にとどまっており、これまでよりも多様なスタイルの授業が普及していることがわかる。

それでは、それぞれの勉強方法の中で、中学生が好んでいるのはどのような方法なのか。「とても好き」と「好き」の割合の合計がも

っとも高いのは、「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」(75.0%)で、わずかの差で「友だちと話し合いながら進めていく授業」(74.4%)と「パソコンを使ってする勉強」(74.3%)と「学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査」(70.7%)が続いている。「グループで何かを考えたり調べたりする授業」(67.4%)も比較的人気が高い。

これに対して、「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」(34.5%)や「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」(41.5%)はあまり好まれない。質問内容からは具体的な中身が見えてこないが、全般的にはどちらかといえば受動的な方法か退屈で反復的な授業の日常から解放されるような勉強方法が好まれる。自ら主体的にじっくりと調べ、工夫しながら発信していくことは好まれないようである。

図1-1-3 好きな学校の勉強方法



2. 家での学習の様子

① 家庭学習の頻度

中学生の家での勉強は、「週に半分以下しかしない(2～3日)」が全体の4分の1で最多。全般に学習頻度が著しく少なくなったという事実はないが、「家ではほとんど勉強しない」中学生が第2回調査よりも6.4ポイント増加している。

Q

家での勉強についてうかがいます(学習塾や予備校、家庭教師との学習は除きます)。あなたはふだん、家でどのくらい勉強をしますか。

第3回調査でも、家での学習の量的な特徴を、(1)1週間の勉強日数、(2)1日の勉強時間、(3)テスト勉強の開始時期の3つの側面からとらえた。

まず、中学生は週に何日くらい勉強しているのか。全体としてみると、「週に半分以下しかしない(2～3日)」とする者が24.7%と最も多い。これに、「家ではほとんど勉強しない」がほとんど同率で続き(23.1%)、「週に半分以上はする(4～5日)」も2割を超えている(21.1%)。「ほとんど毎日する(週に6～7日)」も18.7%を数えており、1週

間の勉強日数の個人差は大きい(表1-1-5)。

時系列でみると、「週に半分以上はする(4～5日)」と「週に半分以下しかしない(2～3日)」の占める割合が若干小さくなり、逆に「家ではほとんど勉強しない」が第2回調査と比べて6.4ポイント増えているのが目立った特徴である(同表)。ただし、「ほとんど毎日する(週に6～7日)」の割合に大きな変化はみられず、学習頻度(勉強日数)の点からみれば全体に中学生が勉強しなくなったとはいえない。

表1-1-5 家庭学習の頻度(時系列)

	(%)		
	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)
ほとんど毎日する(週に6～7日)	19.9	18.7	18.7
週に半分以上はする(4～5日)	27.0	23.0	21.1
週に半分以下しかしない(2～3日)	26.8	29.1	24.7
週に1日くらいしかしない(1日くらい)	8.9	11.6	11.3
家ではほとんど勉強しない	17.1	16.7	23.1

注)()内はサンプル数。

②家での学習時間

平日の家庭学習時間に関して、「ほとんどしない」と「およそ30分」という中学生が30.7%に達し、第1回調査よりもおよそ12ポイント増加した。逆に、テレビの視聴時間は、大幅に増加している。

Q

あなたはふだん（月曜日～金曜日）学校での授業以外に1日に何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。

日曜日は、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください。

ふだん（月曜日～金曜日）テレビを1日に何時間くらい見ますか。

《家庭学習時間》

1日の学習時間についてはどうか。「学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間」を含め、学校での授業以外で勉強に費やす時間を尋ねた。

まず、「平日（月曜日～金曜日）の学習時間」をみってみる。もっとも多いのは「1時間」で2割を占める（20.8%）。とはいえ、「ほとんどしない」～「2時間」と回答した者の割合はいずれも15%前後となっており、ここでも個人差の大きさが浮き出ている（図1-1-4）。顕著なのは、第1回・第2回調査時点からの変化である（同図）。「ほとんどしない」と「およそ30分」という短い学習時間の層が、第1回調査では18.8%にすぎなかったが、第2回調査では微増し、さらに第3回調査では30.7%に達した。10余年でおよそ12ポイントの増加である。

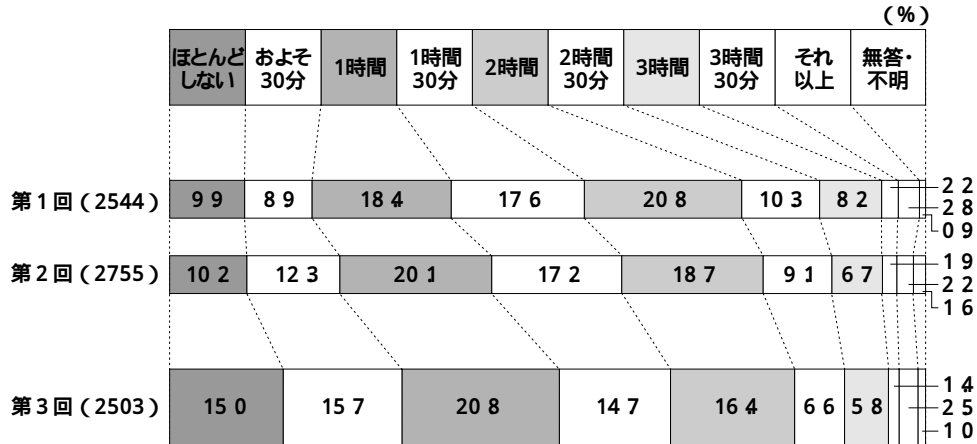
「日曜日の学習時間」についてはどうか（図1-1-5）。もっとも多いのは、「ほとんどしない」で全体の3分の1を占める（34.2%）。これに、「およそ30分」と「1時間」がいずれも17%台で続いている。時系列変化も目立っている（同図）。「ほとんどしない」層の割

合は、この5年間で10ポイントも増加し（24.1%→34.2%）、「およそ30分」も4.4ポイントの増加となった。その分、「1時間30分」以上を勉強に費やす中学生の割合が減ることになった。

《テレビ視聴時間》

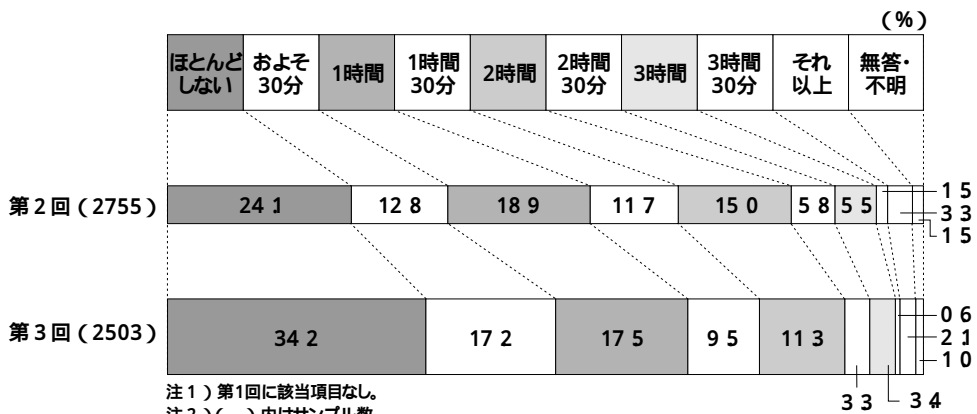
学習時間とトレード・オフ関係にあるといわれる「テレビの視聴時間」についてはどうか。「ふだん（月曜日～金曜日）」の視聴時間をいくつかのカテゴリーに分けて、分布の様子をみた（図1-1-6）。これによると、もっとも多いのは、「3時間30分」よりも長い「それ以上」の層であり、全体の3割程度を占める（30.9%）。一日に「2時間以上」テレビを見る中学生は83.1%に及んでおり、「ほとんど見ない」という中学生は、わずか1.9%にすぎない。「テレビ漬け」ともいえる生活は、一昔前と比べてますます際立ってきた。「それ以上」と回答した中学生の割合は、この間に13.4ポイントも増えている（17.5%→30.9%）。とりわけ、この5年間の変化が顕著であり、増えた視聴時間の大半は直近の5年間に生じたものである。

図1-1-4 平日の家庭学習時間（時系列）



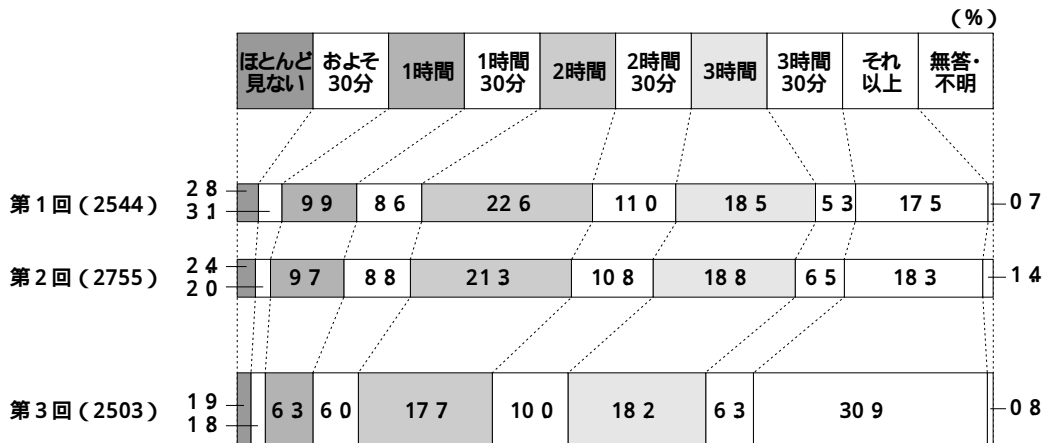
注) ()内はサンプル数。

図1-1-5 休日の家庭学習時間（時系列）



注1) 第1回に該当項目なし。
注2) ()内はサンプル数。

図1-1-6 平日のテレビ視聴時間（時系列）



注) ()内はサンプル数。

③ テスト勉強の開始時期

「1週間くらい前から」定期考査の勉強を始める中学生が全体の3分の1。
 「1週間くらい」以前に準備を始めるケースが4分の3に及ぶ。第1回・第2回調査よりも開始時期が遅くなっているというわけではない。



テスト（定期考査）前には、あなたはいつ頃からテスト勉強を始めますか。

中学生は、定期考査に向けた勉強をいつ頃始めているのか。テスト勉強の開始時期を手がかりに、中学生の家庭学習の量的な特徴を探ってみる（表1-1-6）。

全体として、もっとも多いのは「1週間くらい前から」であり、全体の3分の1がこれに該当する（32.3%）。続いて、「2週間くらい前から」（24.3%）、「10日くらい前から」（18.7%）となっている。「1週間くらい」以

前に準備をする中学生が4分の3に及んでいる。「ほとんどしない」はわずか3.3%である。なお、比較的早くから準備する割合は、女子の場合に若干大きくなっている。

さらに、少なくとも定期考査の勉強の開始時期が遅くなっているという事実は見当たらない（同表）。「2週間くらい前から」にいたっては、第1回調査よりも5.4ポイント増加しているほどである。

表1-1-6 テスト勉強の開始時期（時系列・性別）

(%)

	第1回 (2544)	第2回 (2755)	第3回 (2503)	第3回	
				男子 (1307)	女子 (1184)
2週間くらい前から	18.9	20.0	24.3	21.9	< 26.9
10日くらい前から	20.9	22.6	18.7	18.8	18.6
1週間くらい前から	30.5	31.9	32.3	31.7	33.0
4～5日くらい前から	12.5	12.1	9.5	9.3	9.9
2～3日くらい前から	10.0	7.9	8.4	9.1	7.5
前日から	2.6	2.3	2.4	3.3	1.4
当日の朝くらい	0.7	0.4	0.6	0.8	0.3
ほとんどしない	3.4	2.2	3.3	4.4	2.1

注1) < > は男女で5%以上差があるもの。

注2) () 内はサンプル数。

④家での勉強内容

全体に女子の実施率が高い。家での勉強の中心は「学校の宿題」である。「学校の授業の予習」「学校の宿題」「学校の授業の復習」が5ポイント程度減少し、学校の授業にかかわる勉強が次第に後退しつつある。



家では主にどんな勉強をしていますか。

これまで、家での勉強の量的な側面に焦点を合わせてデータを眺めてみた。以下では、「どのような内容の学習をどのように進めているか」という面について、検討を加えることにする。

まず、「家での勉強の種類」について8つ（第3回）の選択肢を用意し、複数回答を求めた（表1-1-7）。もっとも実施率が高いのが、当然ながら「学校の宿題」である。全体の84.5%が該当する。これとはずいぶん開きがあるが、「学校の授業の復習」（42.0%）が続いている。これらからさらに水をあげられて、「塾や予備校の授業の予習・復習」「書店などで売っている問題集・参考

書」「『進研ゼミ』のような通信教育」が25%前後で続き、「学校の授業の予習」も2割を超えている。なお、性別にみると、ほとんどの項目で女子が男子を上回って実施している（「塾や予備校の授業の予習・復習」を除く）。

第1回・第2回調査と比べて、大きく減っているのが「宅配の家庭学習教材」であり、12ポイントほど減じている。さらに、「学校の授業の予習」「学校の宿題」「学校の授業の復習」がそれぞれ5ポイント程度減少しており、家庭での勉強が学校の授業と切り離されている様子がうかがえる。中学校で「宿題が出されなくなった…」といわれる現象も、この変化の一端を表しているのかもしれない。

表1-1-7 家での勉強内容（時系列・性別）

	第1回（2544）	第2回（2755）	第3回（2503）	第3回	
				男子（1307）	女子（1184）
学校の宿題	89.9	87.6	84.5	80.4	< 88.9
学校の授業の予習	27.8	24.8	21.9	20.2	23.7
学校の授業の復習	46.3	47.5	42.0	38.7	< 45.7
塾や予備校の授業の予習・復習	—	—	26.5	26.5	26.5
塾や予備校の授業の予習	11.6	12.3	—	—	—
塾や予備校の授業の復習	15.3	17.5	—	—	—
「進研ゼミ」のような通信教育	19.1	28.6	23.2	20.0	< 26.5
宅配の家庭学習教材	18.5	8.9	6.4	5.3	7.5
書店などで売っている問題集・参考書	—	31.1	24.7	20.7	< 29.1
その他	5.4	4.8	5.3	4.8	5.7

注1) 複数回答。 注2) —は該当項目なし。 注3) < >は男女で5%以上差があるもの。 注4) ()内はサンプル数。

⑤家での学習の様子

「出された宿題をきちんとやっていく」は91.3%と高率である。第2回調査で増えた学習の習慣化にかかわる項目で、さらに肯定的な回答が増えた。「ながら勉強」は第2回調査よりもさらに多くの中学生に広がっている。



家での勉強の様子についてうかがいます。

第3回調査では、家での学習の様子を探るために、全部で11項目（今回新設の2項目を含む）を設定した。

「あてはまる」「まああてはまる」と回答した割合が大きかったのは、「出された宿題をきちんとやっていく」で全体の91.3%が該当した（表1-1-8）。これに、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」（72.6%）、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」

（61.7%）、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」（59.1%）、「ラジオやテレビ、CDをつけっ放しで勉強する」（57.4%）、「机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる」（56.8%）という状況が比較的多くみられる。

変化についてはどうか（図1-1-7）。第2回調査では、「計画を立てて勉強する」など学習の習慣化にかかわる項目で肯定的な

表1-1-8 家での学習の様子

(%)

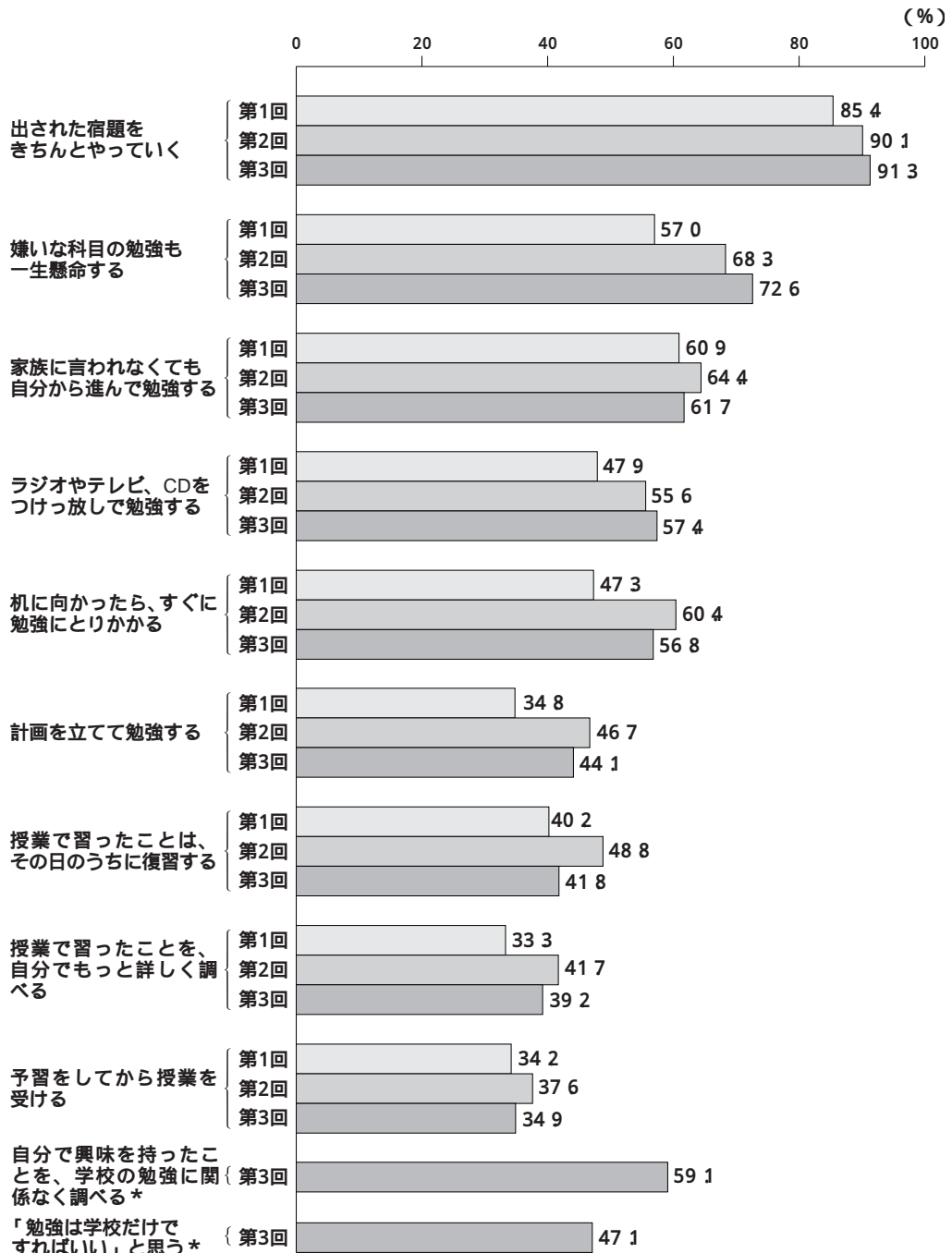
	あてはまる	まああてはまる	あてはまる + まああてはまる
出された宿題をきちんとやっていく	40.5	50.8	91.3
嫌いな科目の勉強も一生懸命する	19.9	52.7	72.6
家族に言われなくても自分から進んで勉強する	19.3	42.4	61.7
ラジオやテレビ、CDをつけっ放しで勉強する	33.1	24.3	57.4
机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる	10.7	46.1	56.8
計画を立てて勉強する	10.9	33.2	44.1
授業で習ったことは、その日のうちに復習する	8.3	33.5	41.8
授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる	3.9	35.3	39.2
予習をしてから授業を受ける	6.1	28.8	34.9
自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる	25.9	33.2	59.1
「勉強は学校だけですればいい」と思う	14.8	32.3	47.1

注) サンプル数は2503人。

反応が増えたが、第3回調査でその水準を維持するだけでなく、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」という回答がさらに4.3ポイント増加した。そんな中で、「ラジオやテレビ、

CDをつけっ放しで勉強する」に「あてはまる」と回答した割合が第1回調査と比べて12.8ポイント、第2回調査と比べて7.1ポイント増加した点が目立つ（基礎集計表参照）。

図1-1-7 家での学習の様子（時系列）



注1) 数値は「あてはまる」と「まああてはまる」の合計。

注2) *は第1回、第2回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2544人、第2回2755人、第3回2503人。

⑥ 日常生活の中での「学習」

中学生にとってもっとも日常的な学習活動は、「読みたい本を本屋で探して買う」である。「美術館や博物館に行く」「日記をつける」はあまりなされない。「日記をつける」「ペットや動物・植物の世話をする」は女子に顕著である。



あなたは、ふだん（学校の授業や宿題以外で）次のことをどのくらいしますか。

第3回調査では、学校での授業や宿題以外に中学生がどのような学習活動を行っているかを尋ねた（表1-1-9）。設定した9つの項目の中で、中学生にとってもっとも日常的な学習活動は、「読みたい本を本屋で探して買う」（「よくする」「時々する」の合計：69.4%）であり、「ペットや動物・植物の世話をする」（52.5%）も半数を超えている。「文学作品や小説・物語を読む」（44.3%）や「新

聞のニュース欄を読む」（41.9%）も比較的多い。これに対して、「美術館や博物館に行く」（13.2%）、「日記をつける」（19.4%）、「自然や動物・植物の本を読む」（23.2%）は中学生にとってはなじみの薄い学習活動である。

全般に、女子のほうがこれらの活動にかかわるケースが多く、特に「日記をつける」と「ペットや動物・植物の世話をする」は女子にひときわ顕著である。

表1-1-9 日常生活の中での「学習」（性別）

(%)

	全体 (2503)	男子 (1307)	女子 (1184)
読みたい本を本屋で探して買う	69.4	67.1	71.8
ペットや動物・植物の世話をする	52.5	44.6	61.1
文学作品や小説・物語を読む	44.3	36.5	52.7
新聞のニュース欄を読む	41.9	43.0	40.3
地域の図書館で本を読んだり借りたりする	30.9	27.1	35.1
歴史小説や歴史の本を読む	28.4	32.1	24.3
自然や動物・植物の本を読む	23.2	24.7	21.5
日記をつける	19.4	9.4	30.6
美術館や博物館に行く	13.2	9.3	17.6

注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。

注2) <>は男女で10%以上、< >は5%以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。

7 家庭環境

「勉強部屋を持っている」中学生がおよそ3分の2に達する。「親とよく話をする」中学生も同じ程度の割合を占める。成績に対する母親の関心は高いが、具体的に「勉強をみる」などのかかわり方は比較的少ない。



あなたの家のことについてうかがいます。

中学生の家庭環境は、さまざまな形で彼らの学習に影響を及ぼす。ここでは、10項目を設けて、該当するかどうかを尋ねた（表1 - 1 - 10）。

まず、物質的な環境として、「自分一人の勉強部屋を持っている」が64.1%に及んでいる点が注目される。3人に2人は自分だけの学習空間が用意されている。「家には本（マンガや雑誌以外）がたくさんある」という中学生も58.2%に及ぶ。なお、この点はこの10余年にわたって変化していない。

次に、父母とのコミュニケーションについてはどうか。「お父さんやお母さんとよく話をする」が66.6%を数え、特に、「お母さん

は私の成績をよく知っている」という中学生が84.1%に達している。なお、「お父さんは私の成績をよく知っている」という回答は53.2%にとどまっている。これに対して、「ほとんど毎日、家の人は私に『勉強しなさい』と言う」（35.0%）ことも比較的少なく、「この1か月の間に、お父さんやお母さんに勉強をみてもらったことがある」（25.0%）とか「家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」（40.4%）という具体的なかかわり方はあまり一般的とは言えない。なお、大学・短期大学の進学率上昇にともなって、父母の「高学歴化」が進んでいる。

表1 - 1 - 10 家庭環境（時系列）

（％）

	第1回（2544）	第2回（2655）	第3回（2503）
家には本（マンガや雑誌以外）がたくさんある	58.2	58.2	58.2
自分一人の勉強部屋を持っている	62.7	62.8	64.1
ほとんど毎日、家の人は私に「勉強しなさい」と言う	38.2	36.9	35.0
この1か月の間に、お父さんやお母さんに勉強をみてもらったことがある	—	—	25.0
お父さんやお母さんとよく話をする	—	—	66.6
お母さんは私の成績をよく知っている	82.8	79.7	84.1
お父さんは私の成績をよく知っている	50.3	49.3	53.2
家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある	42.6	46.0	40.4
お父さんは大学を卒業している	31.3	35.3	41.3
お母さんは大学や短期大学を卒業している	24.7	29.7	38.4

注1) 複数回答。

注2) —は該当項目なし。

注3) ()内はサンプル数。第2回調査は、回答を拒否した100名を除外して計算した。

3. 学校外の学習機会

① 学習塾・予備校の利用

通塾率は43.5%で、第2回調査より4ポイント低下し第1回調査並みになった。「4日以上」通塾する割合は漸減傾向。「補習塾」が全体の3分の2を占め、「1クラスに1人」の個別指導塾に通う中学生は14.7%であり、少人数指導が普及しつつある。

Q

あなたは今、放課後や日曜日に、学習塾や予備校へ行っていませんか(そろばん、習字などの塾は除きます。「公文」のような自習教室は含めません)。

[行っている人にうかがいます]

週に何日行っていますか。

あなたの行っているのは、どんな学習塾(予備校)ですか。

あなたが行っている学習塾(予備校)は1クラス何人ですか。

学校外の学習機会を利用することは、中学生にとってごくありふれた行動になって久しい。現在、さまざまな学習機会が提供されているが、小学生とは違って中学生の塾通いは学習塾に一元化される傾向が強い。ここでは、学習塾、予備校、通信教育、家庭学習教材など主な学習機会の利用状況を概観してみる。

まず、放課後や日曜日に学習塾や予備校に通っている中学生の割合について眺める(図1-1-8)。「行っている」という中学生は全体の43.5%を数えている。もっとも多いのが、「2日」で56.6%に達している。これに、「3日」(20.3%)と「1日」(14.5%)が続き、通塾者の9割以上は「1日～3日」の塾通いをしていることになる(図1-1-9)。

通塾率そのものも第2回調査より4ポイント低下し、第1回調査と同程度だった(図1-1-8)。加えて、「4日以上」の通塾者の割合も、第1回調査12.3%、第2回調査9.4%

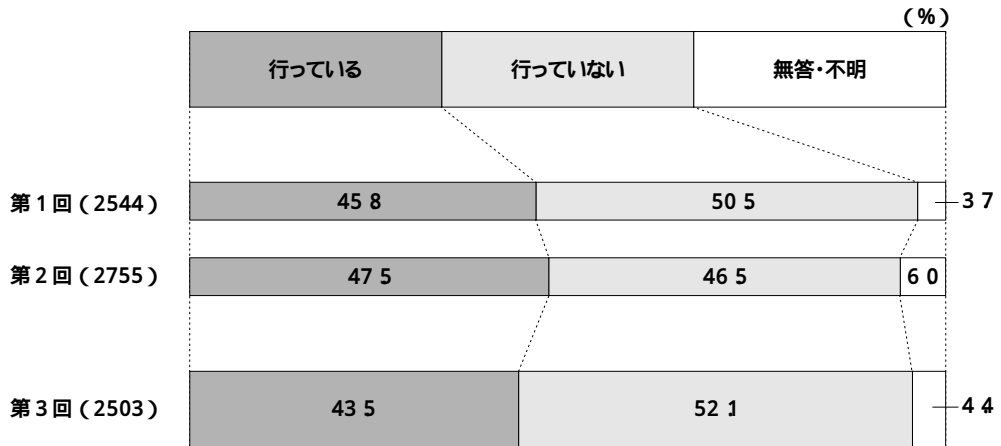
第3回調査7.7%と漸減傾向を示している(図1-1-9)。構造的な不況によって教育

費の切り詰めを余儀なくされているのかもしれない。なお、通塾率や通塾日数に目立った男女差はない。

それでは、学習塾のタイプについてはどうか。ここでは、「学校の勉強がわかるようになるための補習塾」「高校を受験するための進学塾」「その他」の3つのタイプを設定し、各中学生の通っている学習塾や予備校について回答してもらった。全体としては、「補習塾」が3分の2を占め、これに「進学塾」が23.9%で続いている(図1-1-10)。第2回調査で強まった補習塾志向がさらに強まることはなかったようである。

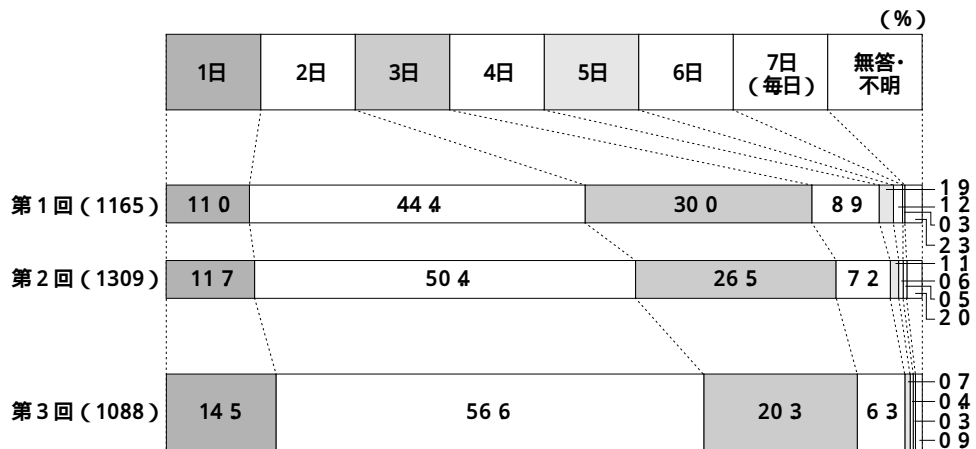
さらに、「個別指導の塾かどうか」について眺めてみる。全体としては、「1クラスに1人」の個別指導の塾に通っている中学生は、14.7%を数えている。また、「1クラスに2～4人」も18.5%となっており、全体に少人数指導が一定程度普及している(図1-1-11)。と同時に、塾による学習条件の違いも決して小さくないと推測される。

図1-1-8 学習塾・予備校の利用（時系列）



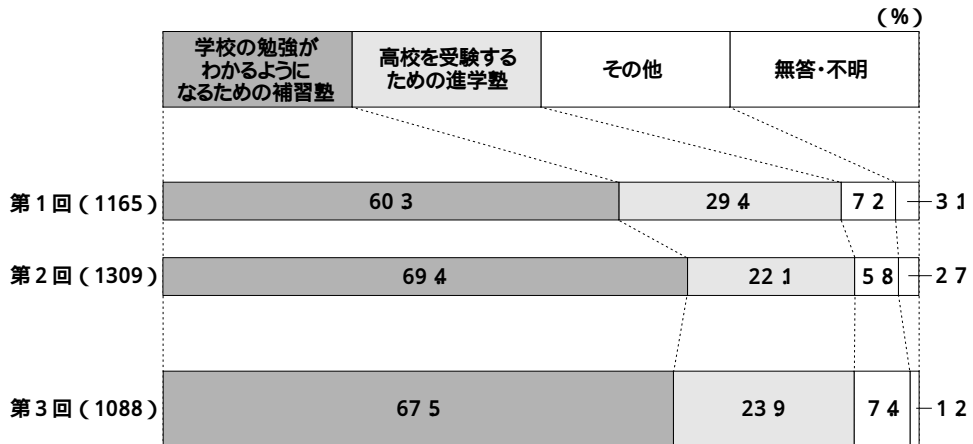
注) ()内はサンプル数。

図1-1-9 通塾日数（時系列）



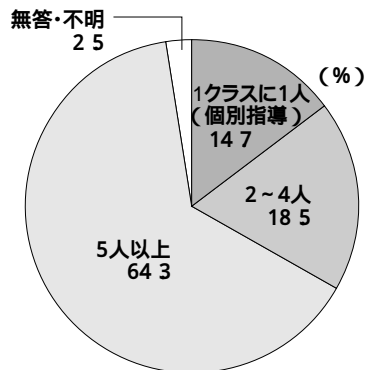
注) ()内はサンプル数。

図1-1-10 学習塾のタイプ（時系列）



注) ()内はサンプル数。

図1-1-11 学習塾の指導人数



注1) 1クラスあたりの指導人数。

注2) 第3回だけの質問項目。

注3) サンプル数は1088人。

② 諸学習機会の利用

「『進研ゼミ』のような通信教育」がもっとも高い利用率である。全体に利用率が低下傾向にあり、特に「学校が行う夏期補習授業（今年の夏休み）」の利用率は10余年で4分の1と大幅に低下している。



あなたは次のようなことをしていますか。

中学生は、さまざまな学習機会をどのように利用しているのか。6つの項目を設けて尋ねてみた（表1-1-11）。

もっとも高い利用率を示したのは、「『進研ゼミ』のような通信教育」で24.8%に達している。これに、「塾や予備校の夏期講習（今年の夏休み）」が続き、22.1%が受講予定だという。以下、「宅配の家庭学習教材」（9.4%）、「家庭教師」（7.6%）は、10%未満にとどまる。「学校が行う夏期補習授業（今年の夏休み）」（1.9%）や「学校が行う補習授業（朝

や放課後）」（1.5%）の利用者はきわめて少数である。

これらの利用状況を時系列でみると、全体に利用率が低下する傾向がある。第2回・第3回調査と一貫して減少したのは、「学校が行う夏期補習授業（今年の夏休み）」と「宅配の家庭学習教材」である。この10余年で前者は4分の1以下に、後者は半分それぞれ大幅な低下を示している。第2回調査で大幅な増加をみせた「『進研ゼミ』のような通信教育」もおよそ4ポイント減となっている。

表1-1-11 諸学習機会の利用（時系列）

（%）

	第1回（2544）	第2回（2755）	第3回（2503）
「進研ゼミ」のような通信教育	20.5	28.7	24.8
塾や予備校の夏期講習（今年の夏休み）	24.0	23.6	22.1
宅配の家庭学習教材	19.1	12.1	9.4
家庭教師	7.4	7.0	7.6
学校が行う夏期補習授業（今年の夏休み）	8.5	3.4	1.9
学校が行う補習授業（朝や放課後）	—	1.9	1.5

注1）複数回答。

注2）—は該当項目なし。

注3）（ ）内はサンプル数。

4 . 学習の方法

①学習の方法

反復練習がもっともオーソドックスな方法である。逆に、「図鑑や事典で調べる」などの方法は少ない。「辞書を引く」は約20ポイントの大幅低下で、教科書をベースにした勉強方法が少しずつ重視されてきている。



家では、どんな勉強の仕方をする人が多いですか。

第3回調査では新たに3項目を加え、合わせて12項目について中学生の勉強の仕方を探ってみた(図1-1-12)。

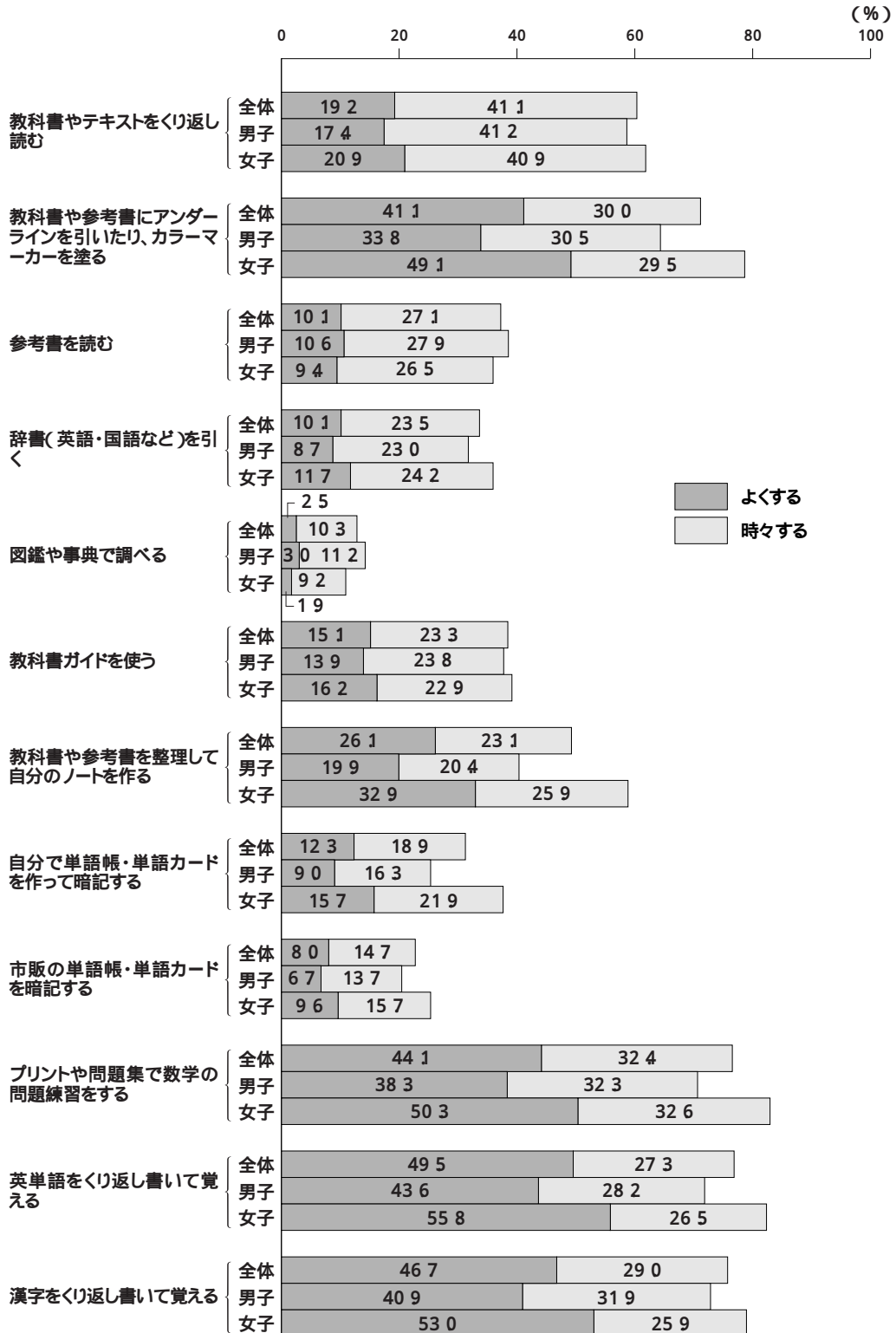
「よくする」「時々する」の合計でみると、反復練習がやはりもっともオーソドックスな方法となっている。「英単語をくり返し書いて覚える」(76.8%)、「プリントや問題集で数学の問題練習をする」(76.5%)、「漢字をくり返し書いて覚える」(75.7%)は、全体の4分の3の中学生にとって一般的な勉強方法となる。「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」(71.1%)も効率よく反復練習するための工夫として定着している。これに対して、自分自身で「図鑑や事典で調べる」(12.8%)という者はごくまれであり、「辞書(英語・国語など)を引く」(33.6%)や単語帳や単語カードを暗記するという方法をとる者も比較的少ない。

性別にみると、女子のほうがさまざまな工夫をしたり反復練習したりする傾向が強いことがわかる。たとえば、「よくする」と回答

した割合で比較すると、「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」は男子で19.9%、女子で32.9%と13ポイントもの開きがある。また、「英単語をくり返し書いて覚える」「プリントや問題集で数学の問題練習をする」「漢字をくり返し書いて覚える」の3項目でもいずれも12ポイント程度の差がみられる。

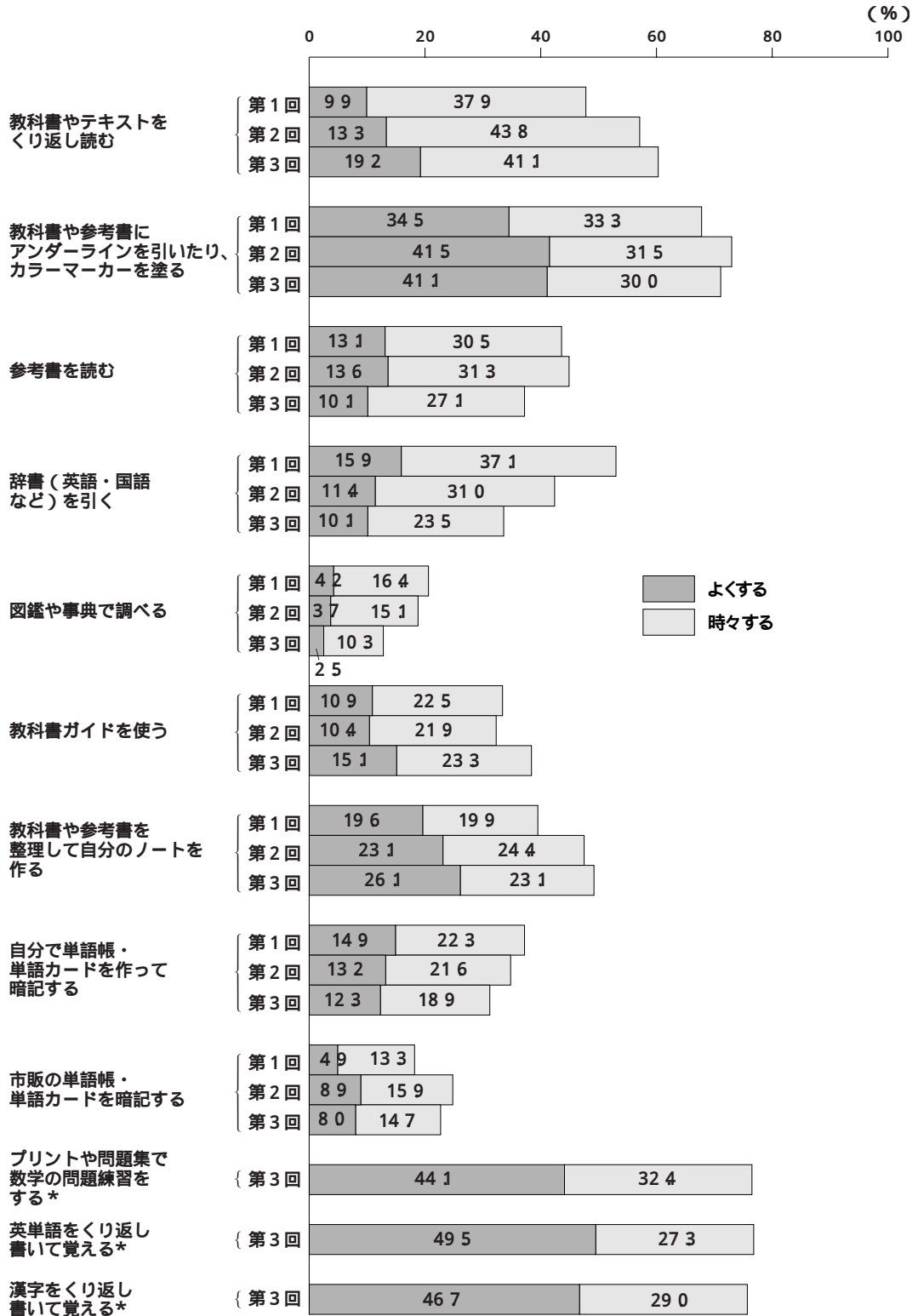
時系列でみると、自分で調べることが次第に少なくなってきたことに気づく(図1-1-13)。たとえば、「よくする」「時々する」の合計でみると、「辞書(英語・国語など)を引く」は第1回調査の53.0%から33.6%に約20ポイントの大幅な減少を示している。さらに、「図鑑や事典で調べる」と「参考書を読む」もそれぞれ7.8ポイント、6.4ポイント低下している。これに対して、「教科書やテキストをくり返し読む」では12.5ポイント、「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」は9.7ポイントそれぞれ増えており、教科書をベースにした勉強方法が重視される傾向が読み取れる。

図1-1-12 学習の方法（性別）



注) サンプル数は全体2503人、男子1307人、女子1184人。

図1-1-13 学習の方法（時系列）



注1) *は第1回、第2回に該当項目なし。

注2) サンプル数は第1回2544人、第2回2755人、第3回2503人。

②学習方法のタイプ

問題集を中心にした復習が多くの中学生の一般的な学習方法で、試験の前に自分で整理し書きながら覚える生徒が多い。「自分で考えること」が次第に軽視されており、中学生の学習方法の実態は新学力観とは逆行してきている。

Q

あなたの勉強の仕方を分類するとすれば、どんなタイプになると思いますか。どちらかといえば近いほうのタイプに をつけてください。

(1か2のどちらか近いほうの番号に をつけてください)

中学生の勉強方法の特徴をより鮮明に描き出すために、互いに異なる一対12組の方法を提示し、いずれか近いほうを選択してもらった(図1-1-14)。

《一方の極に回答が偏る項目》

いずれかの選択肢に回答が集中するのは、以下の6項目である。

- ①「予習中心」(13.5%)よりも「復習中心」(83.3%)
- ②「参考書中心」(19.1%)よりも「問題集中心」(77.5%)
- ③「見て覚える」(25.0%)よりも「書いて覚える」(72.8%)
- ④「毎日こつこつ勉強する」(27.3%)よりも「試験の前にまとめて勉強する」(69.8%)
- ⑤「市販の要点整理などを使う」(27.4%)よりも「自分で整理しながら勉強する」(69.1%)
- ⑥「読んだり、しゃべりながら覚える」(27.6%)よりも「書きながら覚える」(69.8%)

これらの右側の選択肢をまとめれば、現在の中学生の勉強方法の平均的な姿が浮かび上がる。問題集を中心に復習することを重点におき、自分で整理し書きながら覚えるのであるが、それも毎日というのではなく試験の前にまとめて勉強することが多いようである。

《一方の回答が多いものの(6割前後) 圧倒的多数とはいえない項目》

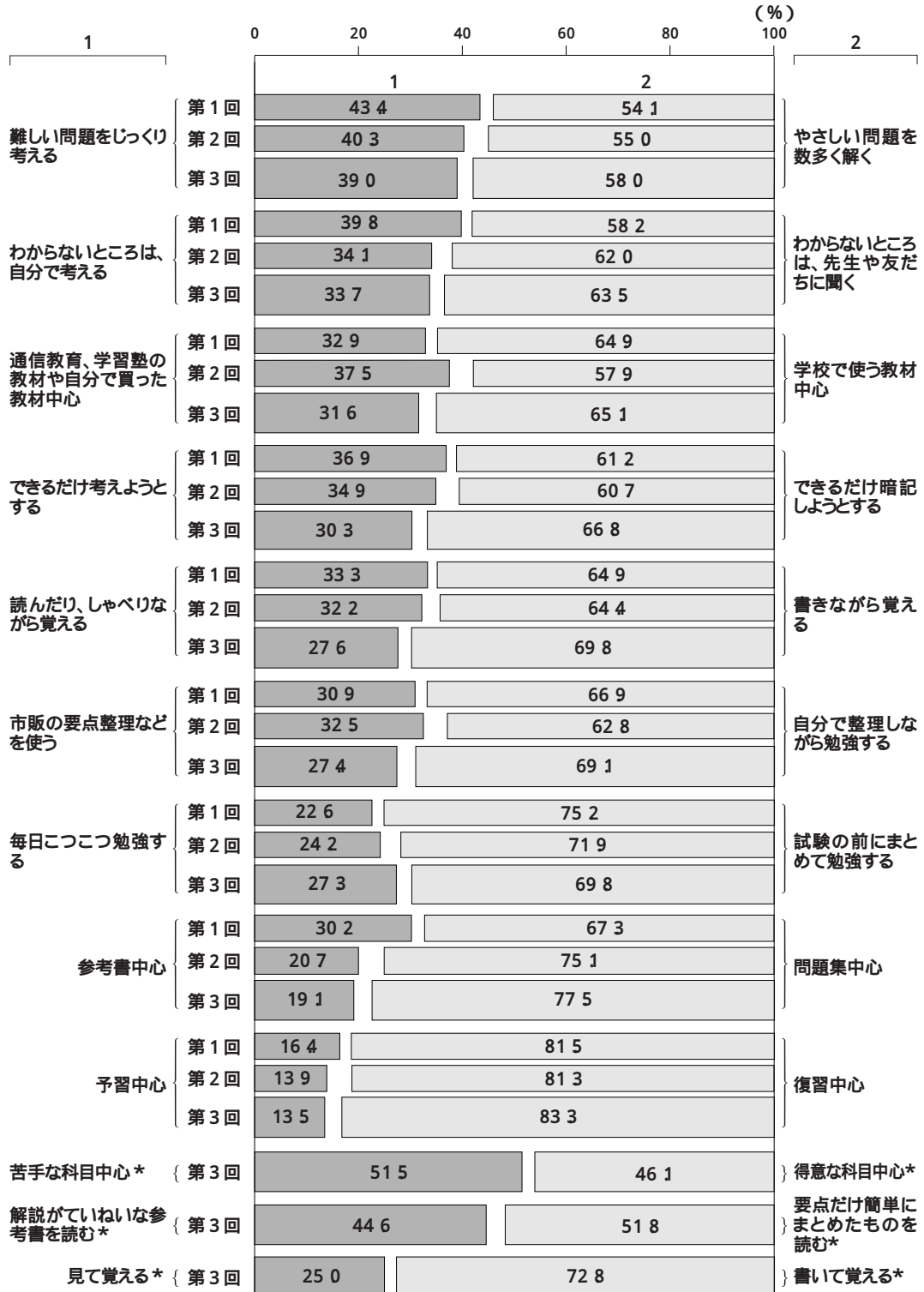
さらに、それよりも回答が分散した項目は以下の4項目である。

- ①「できるだけ考えようとする」(30.3%)よりも「できるだけ暗記しようとする」(66.8%)
- ②「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(31.6%)よりも「学校で使う教材中心」(65.1%)
- ③「わからないところは、自分で考える」(33.7%)よりも「わからないところは、先生や友だちに聞く」(63.5%)
- ④「難しい問題をじっくり考える」(39.0%)よりも「やさしい問題を数多く解く」(58.0%)

全般的には、難題にじっくりと取り組んだり自分で考えなんとか解決するというスタイルはあまりとられていない。

時系列的な変化はそれほど劇的ではないが、1つだけ気になる一貫した変化がある(同図)。それは、「自分で考えること」が少しずつ軽視されていることである。特に、「できるだけ考えようとする」(第1回調査より6.6ポイント減)、「わからないところは、自分で考える」(6.1ポイント減)ことはもともと少数派であり、しかもますます率を落としている。これに対して、「問題集中心」(10.2ポイント増)の勉強や「できるだけ暗記しようとする」(5.6ポイント増)スタイルは次第に広がりつつある。中学生の勉強は、新学力観の目指す方向とは逆にますます機械的なものになってきているようである。

図1-1-14 学習方法のタイプ（時系列）



注1) *は第1回、第2回に該当項目なし。

注2) 1、2の間の空白部分は「無答・不明」を示す。

注3) サンプル数は第1回2544人、第2回2755人、第3回2503人。

③メディアの利用

半数を超える中学生が学校でも家庭でもパソコンを利用している。インターネットの利用も盛んである。特に家庭でのパソコン利用率はわずか5年で倍増しており、家庭による情報リテラシー格差が生まれてくる可能性も考えられる。



パソコンやテレビなどのメディア（機械）についてうかがいます。

第3回調査では、第2回調査の項目に「インターネットの活用」にかかわる2項目を加えた計8項目を設定し、中学生の情報メディアの利用状況を探ってみた（表1-1-12）。

利用率（「よくある」「時々ある」の合計）がもっとも高いのは、「学校でパソコンを使う」の55.6%であり、これにわずかの差で「家でパソコンを使う」が続いている。半数を超える中学生が学校でも家庭でもパソコンと接している。パソコンの主要ツールであるインターネットの利用率も比較的高い。「家でインターネットを使って何か調べる」（31.8%）や「学校でインターネットを使って何か調べる」（25.5%）ということを経験している。また、「CD教材やビデオ教材を使って勉強する」（25.9%）も4分の1を数

える。これに対して、「家でゲーム機用の学習ソフトで勉強する」（7.4%）者や「家でパソコン用の学習ソフトで勉強する」（8.0%）者は全体の1割にも満たない。「テレビやラジオの講座で勉強する」（10.7%）という伝統的な方法も一般的ではない。

第2回調査からの変化をみると、「家でパソコンを使う」という回答の伸びが際だっている（同表）。わずか5年の間に、27.4%から54.7%に倍増しているのである。「学校でパソコンを使う」の伸びもおよそ10ポイントを数えているが、いまや学校よりも家庭での情報メディア利用のほうが一歩先を行っているようである。このことは、情報リテラシーが個々の家庭の経済状況等に左右される可能性を示している。

表1-1-12 メディアの利用(時系列)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)
家でパソコンを使う	—	27.4	54.7
学校でパソコンを使う	—	45.1	55.6
CD教材やビデオ教材を使って勉強する	16.1	25.8	25.9
テレビやラジオの講座で勉強する	8.1	12.5	10.7
家でパソコン用の学習ソフトで勉強する	—	4.8	8.0
家でゲーム機用の学習ソフトで勉強する	—	5.3	7.4
家でインターネットを使って何か調べる	—	—	31.8
学校でインターネットを使って何か調べる	—	—	25.5

注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。

注2) —は該当項目なし。

注3) ()内はサンプル数。

第2節 中学生の学習観・成績観

1. 成績観

①成績の自己評価

成績の自己評価は、真ん中を中心に左右対称のヤマ型の分布である。国語の散らばりが比較的少なく、英語と数学は「できない」と自己評価している中学生が国語に比べて多い。教科ごとの男女差も大きい。

Q

あなたの学校での成績についてうかがいます。

現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。

次の教科（数学、国語、英語）の現在の成績は、学年の中でどのくらいですか。

今の中学生は、自分の現在の成績についてどのようにとらえているのだろうか。

第3回調査でも、(1)現在の成績はどのくらいか、(2)どのくらいの成績がとれたらよいか、(3)(現在の成績は別として)うんとがんばればどれくらいの成績がとれると思うか、という3つの側面から中学生の成績観を探ってみた。

《総合成績の自己評価》

ここでは、総合成績の自己評価を「1(上のほう)」～「4(真ん中)」～「7(下のほう)」の7段階で尋ねている。全体的な特徴としては、「4」に24.1%が該当し、「3」(18.0%)と「5」(17.8%)の層を足し合わせた約6割が中央に集まっている(表1-2-1)。相対評価として問われていることも

表1-2-1 総合成績の自己評価(時系列・性別)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)	第3回	
				男子(1307)	女子(1184)
1(上のほう)	4.9	5.5	4.9	5.3	4.4
2	12.0	13.7	12.0	11.9	12.2
3	20.1	18.1	18.0	16.6	19.7
4(真ん中)	21.9	21.0	24.1	23.4	24.7
5	16.9	17.8	17.8	17.6	17.8
6	13.3	12.1	12.6	13.2	12.2
7(下のほう)	9.8	9.5	8.7	9.8	7.6

注)()内はサンプル数。

あり、成績の自己評価は左右対称のヤマ型に近い分布となっている。第1回・第2回調査と比べても、大きな変化は見当たらない。性別にみると、女子のほうが「3」という回答が若干多く、男子のほうが二極化する傾向が強いことが読み取れる。

《教科の成績の自己評価》

次に、数学と国語と英語について、7段階の自己評価をしてもらった(表1-2-2)。

いずれも「4」の回答がもっとも多く両方に裾野が広がる分布であるが、教科によって多少の違いがある。1つは、真ん中への集中度の違いである。国語の場合には、約3割が「4」に集中するが、数学と英語では2割あまりにとどまる。数学や英語に比べて国語の成績の自己評価の分散は小さいと言える。こ

れは、一般的な学力試験の実際の得点分布でもしばしば観察される事実である。もうひとつは、分布の歪みに関する違いである。国語は左右対称の分布型を示すが、数学と英語は「1」～「3」の割合が比較的小さい。数学と英語はすでに「できない」という自己認識が強くなっていることがわかる。

性別による違いもかなり大きい。男子は数学を「1(上のほう)」とする割合が大きく、女子の2倍に上る(9.0%と4.6%)。数学が好きで理解度(自己評価)も高いという先述の結果と符合している。女子は、国語の自己評価が男子よりもかなり高くなっている。この点も先のデータと重ね合わせると理解しやすい。また、英語については、「7(下のほう)」と回答した男子の割合が女子の2倍近くになっている点が注目される(15.0%と7.9%)。

表1-2-2 教科の成績の自己評価(性別)

(%)

		全体(2503)	男子(1307)	女子(1184)
数学	1(上のほう)	7.0	9.0	4.6
	2	12.1	15.2	8.8
	3	15.2	14.4	16.2
	4(真ん中)	23.7	22.5	25.0
	5	16.8	15.2	18.6
	6	13.6	12.2	15.1
	7(下のほう)	9.9	9.9	9.8
国語	1(上のほう)	4.6	3.9	5.4
	2	11.0	9.5	12.5
	3	18.2	16.3	20.4
	4(真ん中)	30.2	28.1	32.6
	5	18.3	21.8	14.4
	6	11.1	12.7	9.2
	7(下のほう)	5.2	6.3	3.9
英語	1(上のほう)	8.0	8.7	7.0
	2	12.6	13.2	12.1
	3	15.6	14.4	17.0
	4(真ん中)	21.0	18.7	23.5
	5	16.7	16.0	17.5
	6	12.9	12.5	13.4
	7(下のほう)	11.7	15.0	7.9

注) ()内はサンプル数。

②とりたいと思う成績

中学生の希望する成績は、7段階の中の「1（上のほう）」と「2」に6割以上が集中。「とれたらいい成績水準」はこの10余年でまったく低下せず、むしろわずかずつ上昇している。



あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。

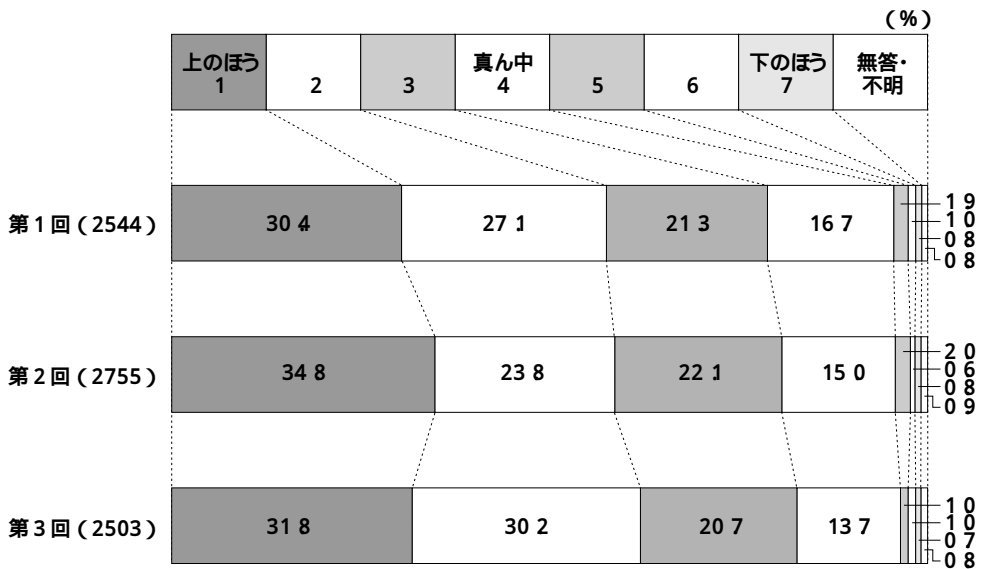
中学生は、どのくらいの成績を望んでいるのだろうか。次に、自らが期待する成績の水準について検討を加えてみる(図1-2-1)。

成績の自己評価とは異なり、回答の分布は「1（上のほう）」に大きく偏っている。全体の31.8%が「1」と回答しており、さらに「2」を加えると全体の62.0%がこの水準を望んで

いる。「5」～「7」と回答した者は3%にも満たない。

しかも、この10余年の間に「とれたらいい成績水準」は低下していないようである。「1」～「3」の合計で見ると、第1回調査から78.8% 80.7% 82.7%とわずかずつ増加している。

図1-2-1 とりたいと思う成績（時系列）



③ がんばればとれると思う成績

「がんばればとれると思う成績」もまたきわめて高水準にある。上位の「1」～「3」に78.6%が集中し、この割合は、第1回調査から第3回調査まで減少するどころか増加している。



現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

さらに、「現在の成績は別としてとれると思う成績」を尋ねた。学業成績という点に限定して、どのくらい潜在能力があると自分で評価しているかを探るための問いである。

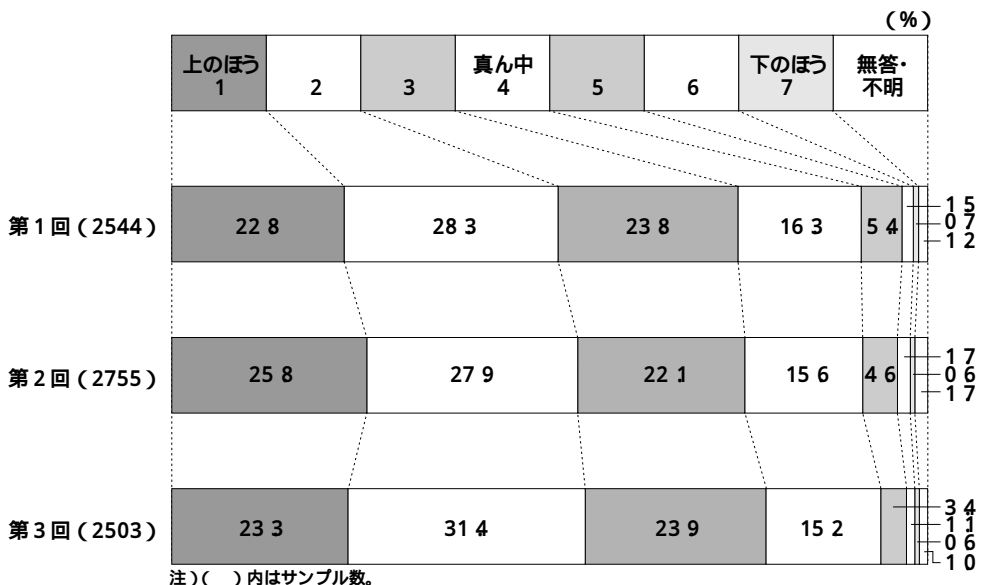
結果は、前項とかなり似通っている（図1-2-2）。いくらか分布は、「下のほう」に移行しているものの、全体の23.3%が「1」と回答している。上位の「1」～「3」を合

計すると、78.6%に達している。

ここでも、時系列変化は「下のほう」に移っているわけではない。先ほどと同じように「1」～「3」の合計でみると、74.9% 75.8%

78.6%とこれもまたわずかながら増加している。成績の自己期待も潜在能力認知も低下を示していないところに1つの特徴があるようである。

図1-2-2 がんばればとれると思う成績（時系列）



④成績観・学力観

中学生は、学力の重要性を見落としているわけではなく、成績にこだわらない者は少数派。他方では、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」という回答が62.8%に上る。



あなたは、次のように思うことがありますか。

中学生の成績に対する希望はかなり高い水準にあった。先述したのは、いわば成績のおおまかな量的側面である。ここでは、もう少し具体的内容に踏み込んで、彼らの成績観や学力観の底流を探ってみたい。

第3回調査も第2回調査と同様に、6項目について尋ねた(表1-2-3)。該当率が多い順にあげておくと、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(62.8%)、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(57.8%)、「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」(45.9%)、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」(32.7%)、「今は勉強することが一番大切なことだ」(24.5%)、「そんなに勉強しなくても、なん

とか進学できるだろう」(16.7%)となる。上昇志向はかなり強く、「進学のための手段」としての学力の重要性を見落としているわけではない。とはいえ、学力は、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力」であって、それ自体を絶対視しているわけではない。学校が楽しければよいというのでもなければ、勉強一辺倒でもない。中学生は独特のバランス感覚をもって、勉強や学力をみているようである。

一貫した時系列変化はさほどみられないが、「今は勉強することが一番大切なことだ」が約5ポイント減となり、「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」が8ポイント以上増え、第1回調査のレベルに戻った点が目を引く。

表1-2-3 成績観・学力観(時系列)

	(%)		
	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	59.3	62.1	62.8
できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい	62.6	56.4	57.8
どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい	44.1	37.7	45.9
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	27.8	33.7	32.7
今は勉強することが一番大切なことだ	29.8	29.7	24.5
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	—	12.0	16.7

注1) 複数回答。 注2) —は該当項目なし。 注3) ()内はサンプル数。

⑤ よい成績に大切だと思ふこと

よい成績をとるのに大切な条件トップ・スリーは、「授業をしっかりと聞く」「努力」「上手な勉強法」である。「運」や「よい学習塾や予備校に行く」をあげる割合が第1回調査よりも増加している。



よい成績をとるためには、次のことはどれくらい大切だと思いますか。

中学生は、よい成績をとるためにはどのような条件が大切だと考えているのだろうか。ここでは、第2回調査と同様に、10の条件をあげてそれぞれの「大切さ」を評定してもらった(表1-2-4)。

「とても大切」の割合でみると、「授業をしっかりと聞く」(79.4%)、「努力」(77.8%)、「上手な勉強法」(71.4%)がトップ・スリーである。中学生は、授業を中心にして上手な勉強法を身につけながら努力することがよい成績をとる鍵を握っていると考えている。これに、「人に負けたくないという気持ち」(52.7%)、「教え方の上手な先生」(45.2%)、「自分に合った問題集・参考書」(41.3%)が

続く。「よい学習塾や予備校に行く」(10.4%)、「家族の協力」(13.4%)、「生まれつきの能力」(17.9%)は「よい成績」には結びつきにくいととらえられている。

これらの順位は第2回調査とまったく同じであるが、細かくみるといくつか変化もみられる(同表)。たとえば、「運」(「とても大切」「まあ大切」の合計で第1回調査よりも7.1ポイント増)や「よい学習塾や予備校に行く」(5.4ポイント増)は、本人の努力によってはカバーしきれない要因(しばしば家庭的・経済的環境によって左右される条件)である。これらが少しずつウェイトを大きくさせている点は気になるところである。

表1-2-4 よい成績に大切だと思ふこと(時系列)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)
努力	96.9	96.9	97.4〔77.8〕
運	58.6	56.9	65.7〔22.8〕
上手な勉強法	94.4	94.9	95.6〔71.4〕
自分に合った問題集・参考書	79.8	82.0	80.1〔41.3〕
授業をしっかりと聞く	95.8	96.6	96.5〔79.4〕
生まれつきの能力	45.1	44.6	46.9〔17.9〕
人に負けたくないという気持ち	85.7	84.9	84.7〔52.7〕
家族の協力	49.7	47.4	49.8〔13.4〕
よい学習塾や予備校に行く	34.7	38.3	40.1〔10.4〕
教え方の上手な先生	78.7	80.3	81.0〔45.2〕

注1)数値は「とても大切」と「まあ大切」の合計。注2)第3回の〔 〕内は「とても大切」の割合。
注3)〔 〕内はサンプル数。

2 . 学習していて感じること

数学や社会を自ら工夫して考え学ぶという中学生は比較的少なく、この5年間で状況は変わっていない。男女によって学ぶことの動機づけが異なっており、女子の場合、コミュニケーションや人間関係への関心が高い。



あなたは勉強していて、次のように感じるがありますか。

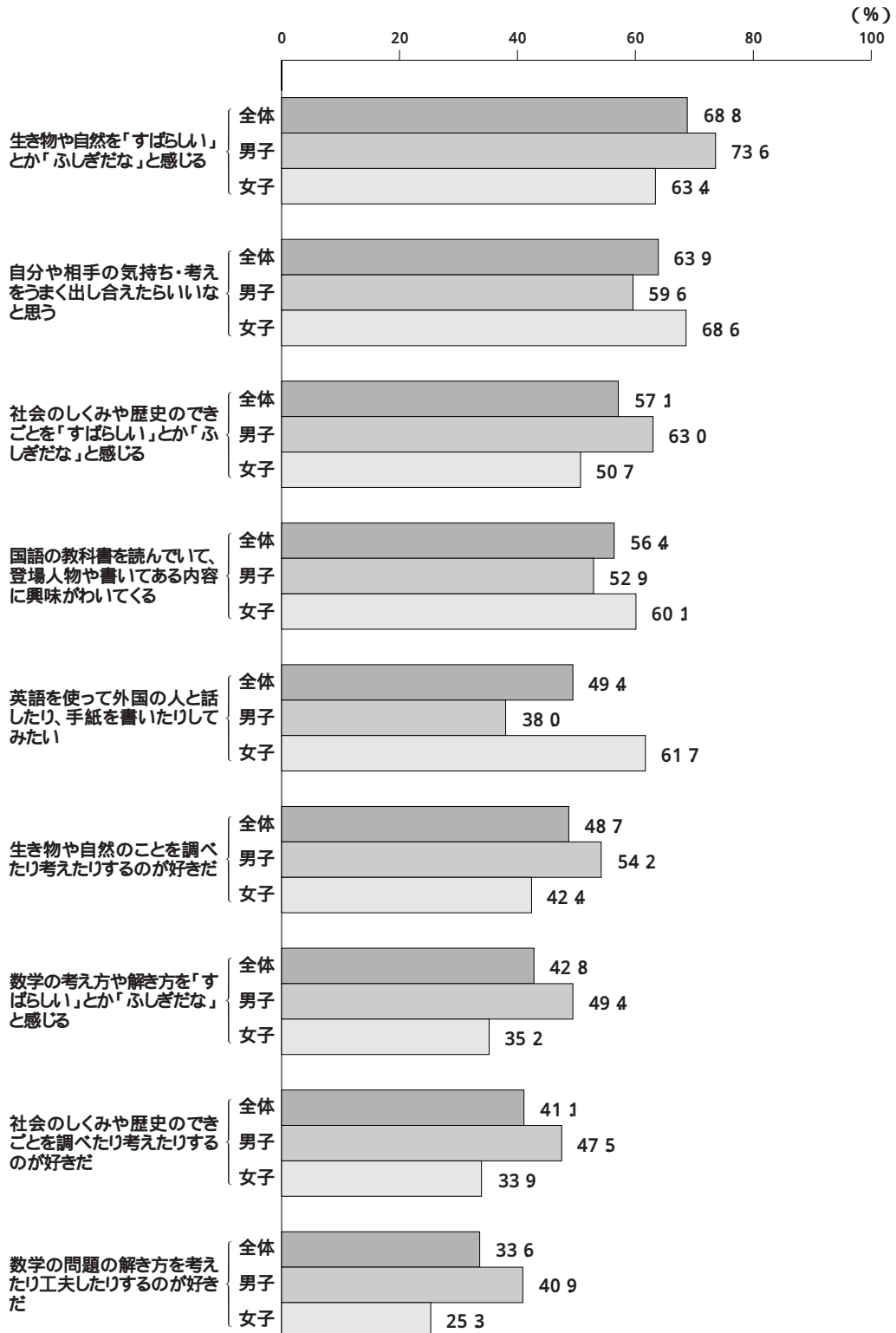
学習は、単に知識を習得すること自体の喜びだけでなく、中学生が視野や生活世界を広げていくきっかけをもたらしてくれる。ここでは、9つの項目を設定して、それぞれについて4段階（「よくある」「時々ある」「あまりない」「ぜんぜんない」）で回答してもらった（図1-2-3）。

「よくある」「時々ある」の合計でみると、もっとも多いのは「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」（68.8%）であり、これに「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」（63.9%）、「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」（57.1%）、「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」（56.4%）が続く。これに対して、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」（33.6%）や「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」（41.1%）や「数学の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」（42.8%）のはどちらかといえば少数派である。第2回調査と比べても大きな変化は

なく、新学習指導要領の内容が移行措置により一部実施されていても専門家の感じ方・受け取り方を中学生たちに伝えていくことはできていない。

重要な違いは、性差に表れている。男子が「数学の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」と答えるケースが多いのに対して、「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」の2項目は女子に顕著である。前節の知見と照らし合わせるなら、この違いにはコミュニケーションや人間関係に対する興味・関心の違いが表れていると考えてよい。「学ぶことの内的なインセンティブ」が男女によって大きく異なっている状況を認識することは、学力についての議論の中ではすっぱりと抜け落ちている重要なポイントである。

図1 - 2 - 3 学習していて感じること（性別）



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。

注2) サンプル数は全体2503人、男子1307人、女子1184人。

3. 学習上の悩み

「好きになれない科目」があり、「上手な勉強法がわからない」という悩みが一般的で、悩みは女子に多い。「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という意識は一貫して強まっている。



あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

さて、中学生は勉強する過程で、どのような悩みを抱いているのだろうか。第3回調査では、「小学校までにもっと勉強しておけばよかった」を新しく項目として加え、全部で15項目について複数回答形式で回答を求めた。

もっとも多かったのは、「どうしても好きになれない科目がある」(73.2%)であり、全体の4分の3にも及んでいる(表1-2-5)。さらに、「上手な勉強の仕方がわからない」(68.8%)、「覚えなければいけないことが多すぎる」(63.0%)と続き、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」(56.5%)、「こつこつと努力できないで困る」(55.7%)、「わかりやすい授業にしてほしい」(52.2%)も半数を超えている。これに対して、多くの中学生は、よい参考書・問題集がないことや親や教師の期待を必ずしも悩みとして受け止めていない。これは、中学生時点ですでに学習への構えが分化してお

り、彼らなりに受容しているからではないかと考えられる。

性別にみると、ほとんどの項目で女子のほうが多く、「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」「覚えなければいけないことが多すぎる」「上手な勉強の仕方がわからない」といった気持ちを抱く生徒が男子よりも多い。

時系列でみると、第2回調査ではあまり変化を示さず、第3回調査で増加した項目が目立つ(図1-2-4)。総じて肯定する割合の大きな項目で、さらに率が高まったケースが多い。一貫して増加しているのは、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないかと思う」であり、第1回調査よりも10.6ポイントも増加している。学習内容の意味が意識の上で少しずつ希薄になっていることが学習時間の減少などの一因となっているかもしれない。

表1-2-5 学習上の悩み(性別)

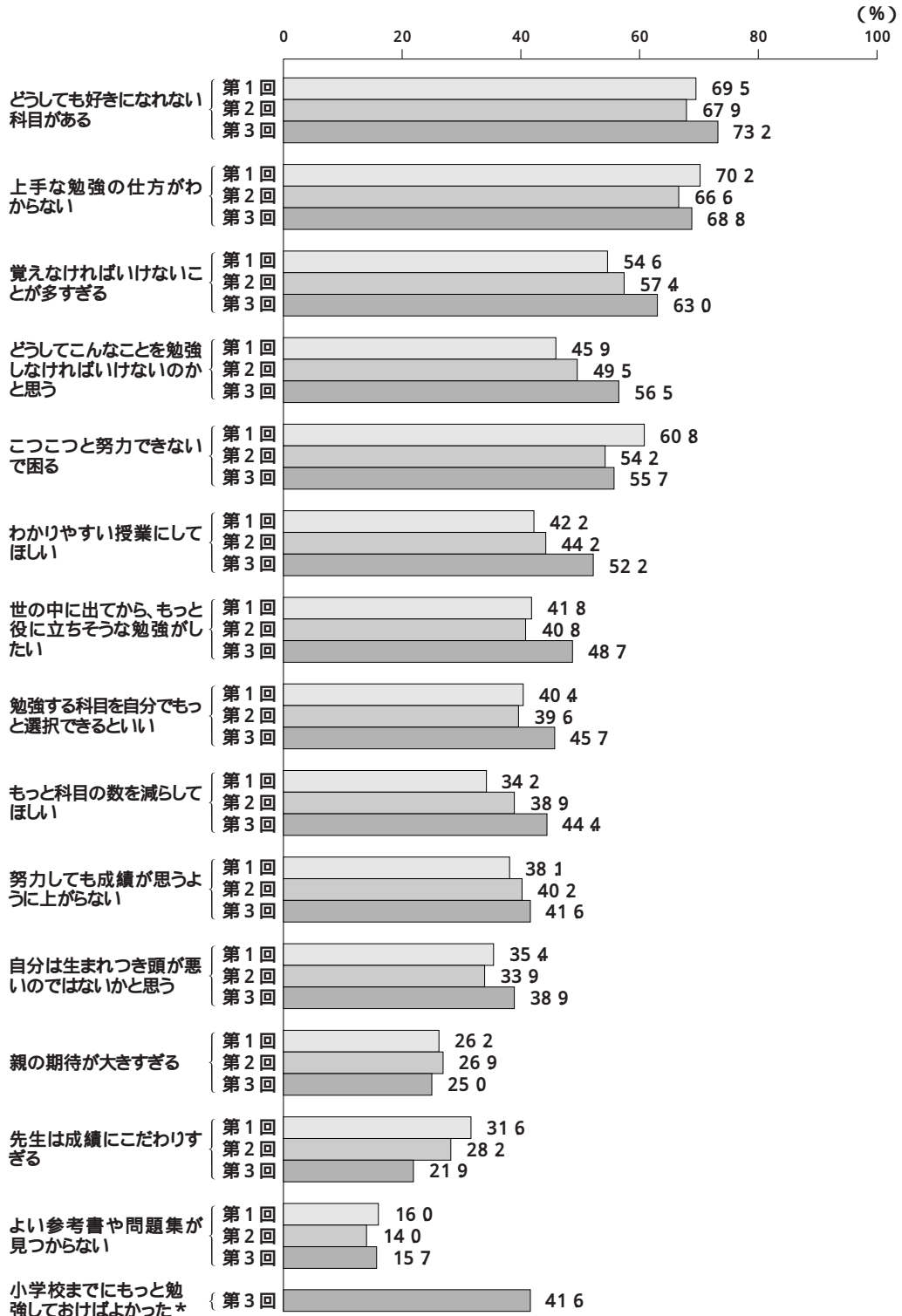
	(%)		
	全体(2503)	男子(1307)	女子(1184)
どうしても好きになれない科目がある	73.2	71.3	75.3
上手な勉強の仕方がわからない	68.8	64.7	< 73.4
覚えなければいけないことが多すぎる	63.0	58.0	≪ 68.6
どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う	56.5	53.2	< 60.4
こつこつと努力できないで困る	55.7	54.1	57.3
わかりやすい授業にしてほしい	52.2	49.0	< 55.8
世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい	48.7	49.2	48.1
勉強する科目を自分でもっと選択できるといい	45.7	45.6	45.8
もっと科目の数を減らしてほしい	44.4	44.5	44.3
努力しても成績が思うように上がらない	41.6	38.2	< 45.7
自分は生まれつき頭が悪いのではないと思う	38.9	34.7	< 43.7
親の期待が大きすぎる	25.0	28.6	> 21.2
先生は成績にこだわりすぎる	21.9	20.4	23.8
よい参考書や問題集が見つからない	15.7	15.4	16.0
小学校までにもっと勉強しておけばよかった	41.6	42.2	40.8

注1) 複数回答。

注2) ≪ ≫は男女で10%以上、< >は5%以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。

図1 - 2 - 4 学習上の悩み（時系列）



注1) 複数回答。

注2) *は第1回、第2回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2544人、第2回2755人、第3回2503人。

4 . 進路・進学意識

① 高校への進学

高校進学希望率は94.6%である。普通科希望が7割を、専門学科希望も2割を超える。また、「推薦入試」志向が強まっている。「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」を希望する者が最多で、「自分の好きな教科・科目を自由に選択できる高校」も人気が高い。

Q

あなたは中学卒業後、高校（高等専門学校を含む）に進学したいと思っていますか。

[思っている人にうかがいます]

どの学科に進学したいですか。

どのような高校に進学したいですか。

高校へ進学する方法には、大きく分けて「推薦入試」と「一般入試」の2つの方法があります。あなたは、どちらの方法で進学したいですか。

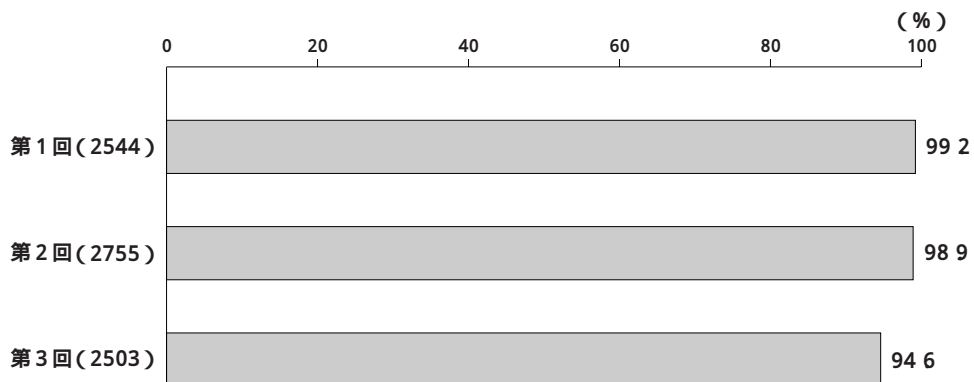
最後に、中学校を卒業してからの進路などについて尋ねた。

まず、卒業後進学を希望する中学生は、全

体の94.6%に及んでいる（図1-2-5）。

高校進学は社会心理的に義務化しているとい
ってよい状況にある。

図1-2-5 高校への進学希望（時系列）



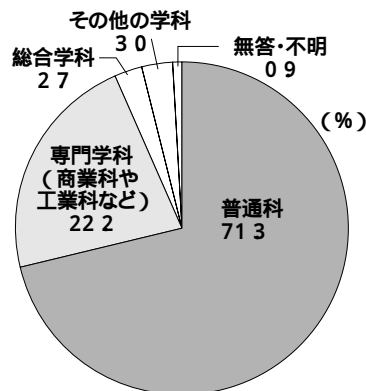
注) ()内はサンプル数。

さらに、進学希望者にのみ希望する学科などを尋ねてみた。普通科希望が71.3%、専門学科が22.2%を数え、総合学科は2.7%にとどまった(図1-2-6)。全体的に普通科志向が強い中で、特に男子を中心に専門学科人気が比較的高い点は注目される。あわせて、高校進学の際の入試方法について尋ねているが、一般入試よりも推薦入試を好む生徒が14.7ポイントも多い(図1-2-7)。

それでは、中学生はどのような高校を希望しているのか(図1-2-8)。9つの項目(「その他」を含む)について複数回答を求めたところ、極端に抜きん出ているはないが、「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」(62.3%)がもっとも人気が高く、「自分の好

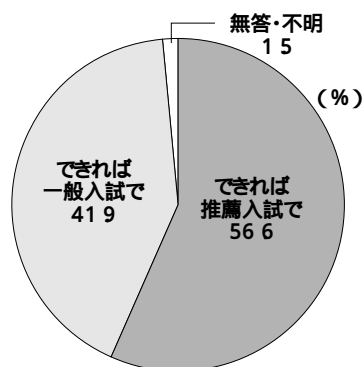
きな教科・科目を自由に選択できる高校」(58.9%)がこれに続く。「校則がきびしくない高校」(51.6%)や「職業資格を取るのに有利な高校」(50.3%)が半数にも達している。これに対して、「それほど努力しなくても入学できる高校」(20.1%)や「体験的な学習などのカリキュラムに特色のある高校」(20.3%)を希望する者は比較的小さい。さらに、「進学状況のよい高校」もわずか33.4%にとどまっている。性別による違いも比較的大きく、「校則がきびしくない高校」と「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」は女子に人気があり、「部活動のさかんな高校」は男子に希望者が多い。

図1-2-6 希望する学科



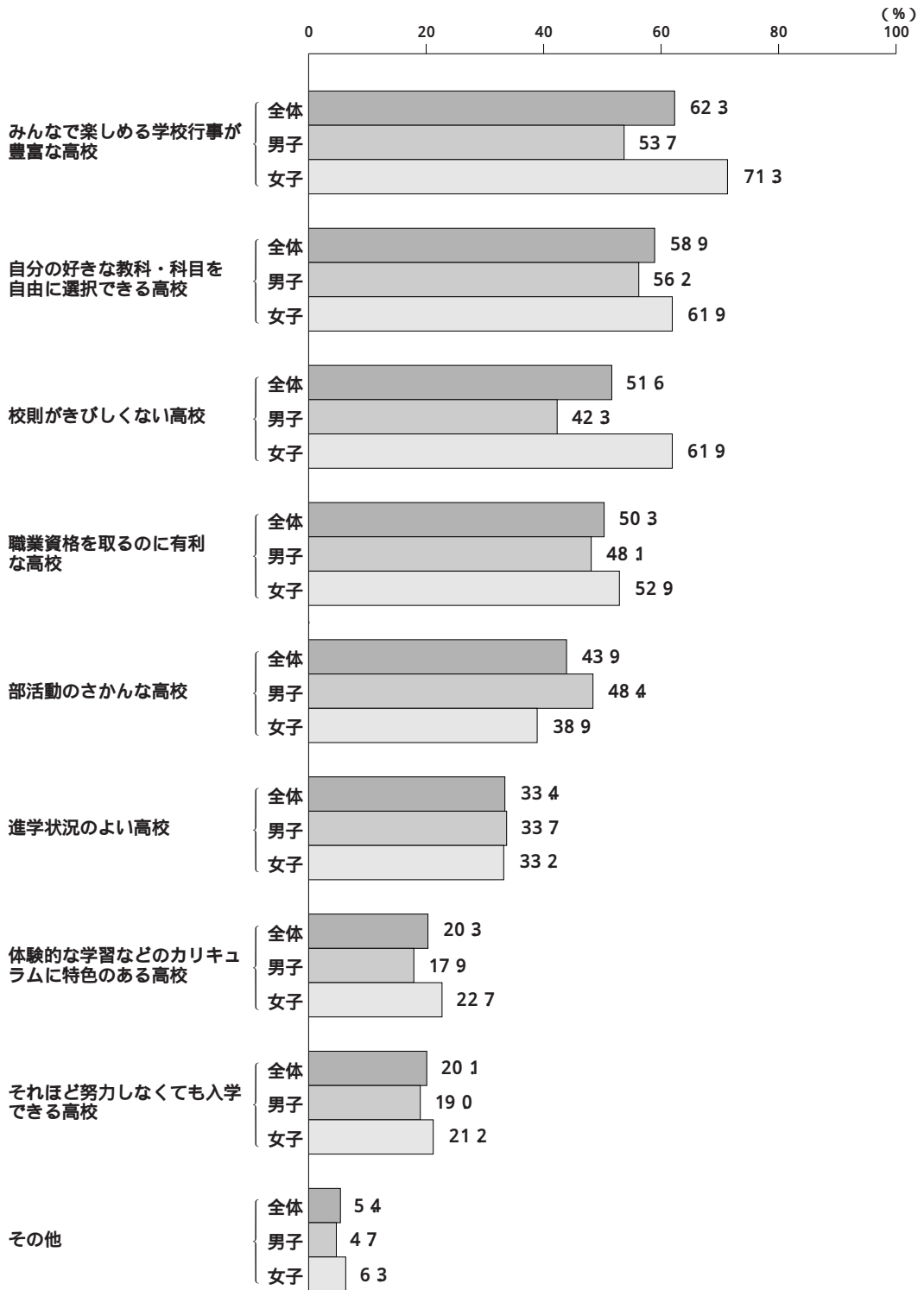
注) サンプル数は2369人。

図1-2-7 希望する入試方法



注) サンプル数は2369人。

図1-2-8 希望する高校のタイプ(性別)



注1) 複数回答。

注2) サンプル数は全体2369人、男子1228人、女子1131人。

②希望する進学段階

希望する進学段階の最多は「四年制大学まで」(31.7%)であるが、女子は二年制の中等後教育機関を希望する傾向がある。また、「専門学校・各種学校まで」「高校まで」の希望者が増加傾向にある。

Q

あなたは中学卒業後、高校（高等専門学校を含む）に進学したいと思っていますか。

[思っている人にうかがいます]

あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

最後に、6つの選択肢を設けて、将来の進路希望を尋ねた。なお、第3回調査については、高校進学希望者(2369人)を母数としているため単純な比較には注意が必要である。とはいえ、希望する進学段階のたまかな傾向はつかめる。

「四年制大学まで」が31.7%でもっとも多く、「高校まで」が26.8%、以下、「専門学校・各種学校まで」(19.7%)、「短期大学まで」(14.4%)となっている(表1-2-6)。女

子は、二年制の中等後教育機関「専門学校・各種学校」や「短期大学」への希望が多く、男子は「高校まで」「四年制大学まで」を希望する者が多い。さらに重要なのは、「専門学校・各種学校まで」と「高校まで」の希望者の割合が第1回調査よりそれぞれ5ポイント前後増加したという点である。「短期大学まで」は下げ止まったが、不況下において高等教育の「地図」は少しずつ変わり始めているのかもしれない。

表1-2-6 希望する進学段階(時系列・性別)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2369)	第3回	
				男子(1228)	女子(1131)
高校まで	22.2	26.1	26.8	31.1	> 22.2
専門学校・各種学校まで	14.6	16.2	19.7	13.3	≪ 26.7
短期大学まで	20.0	14.3	14.4	10.3	< 18.8
四年制大学まで	39.5	32.7	31.7	36.7	≫ 26.0
大学院まで	—	6.8	5.4	6.5	4.2
その他	1.8	1.5	1.3	1.4	1.1

注1) —は該当項目なし。

注2) ≪ ≫は男女で10%以上、< >は5%以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。第1回、第2回調査では全員に回答してもらっているが、第3回調査では高校進学希望者を母数としている。